
芥子の花咲く

水嶋ゆり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

芥子の花咲く

【Zコード】

Z8375C

【作者名】

水嶋ゆり

【あらすじ】

19世紀中頃英國の大学生、ケイン・スタンフォードは、天文学者をしていた。ある時、友人のジャックからこの世に2つの月が存在するという桃源郷のような土地があることを知らされ興味を持った。運命の糸に導かれるように仲間と共にかの地、インドに降り立つた。2つの月を探すうちケインは偶然ある恐ろしい計画を耳にしてしまつ。そこで巡り会つた皇女、ジャスミンとの運命的な愛。やがて明らかにされる2つのつきの正体とケインの出生の秘密。それは図らずも皇女ジャスミンの秘密をも暴いてしまうことになる。

プロローグ

1

プロローグ

時は1835年、5月。所はロンドンにあるR大学構内。ケイン・スタンフォードは、毎日午後の授業が終わると決まってその足で構内に設置されている天文台に立ち寄る。天文学を専攻している彼にとつて唯一安らげる場所だからだ。しかも夜になるまで誰にも邪魔されず一人になれる。

ところがその日ばかりはいつもと違っていた。授業が終わり学内から出ると、友人で考古学者志望の学生、ジャックが声を掛けてきた。

「やあ、ケイン。またいつもの場所に行くのかい？」

ケインと歩幅を合せるように並列して歩く。

「ああ。」

「ちょっと相談があるんだけど……一緒に行つてもいいか?」

少々真顔になつたジャックを不思議そうに見つめながらケインは言葉無く頷いた。

「相変わらず殺風景な部屋だなあ」

大きな望遠鏡を目の前にしてジャックが呟いた。

「コーヒーでいいかい?」

ジャックの呟きも気にせずケインが問いかけた。

「ああ。」

ジャックもそれに一言だけ答え、空いている椅子に腰を下ろした。

「……で? 相談て何?」

二人の間にカップを置きながらケインが切り出した。

「ケイン。この世の中に月が2つある。という場所を知つてゐるか?」

唐突にジャックが言った。ジャックは頭がおかしくなったのか、まじまじとその顔を見た。しかし彼の顔は真剣そのものだ。友人の反応にジャックはフッとため息を漏らした。少し表情が和らぐ。

「ああ悪い。突然こんな事言つて。けどこの話は本当の事らしいんだ。まあ聞いてくれ。インドは知つてるだろ？その山奥に小さな集落がある。そこでは月が2つ存在するというんだ。俺もそんな馬鹿げた話信じちゃいなかつたんだが、実際そこに行つて来たという人が教授に話したんだ。そこはそこは桃源郷のような所で、一年中花が咲き乱れているらしい。いろいろ話を聞いていくうちに考古学的にも君の専門の天文学的にもとても魅力のある所だ、ということがわかつた。そこでだ、我々考古学班がその場所へ行つてその話が本当かどうか確かめることになつたんだ。で、月が2つ存在するという話の見極めも兼ねて君を誘いに来た、という訳さ。」

ジャックの言葉に驚きながらもケインの瞳はキラキラ輝き始めた。

「ケイン。今まで何年も友達付き合いをして來たが、君の瞳つて緑色だつたんだね？初めて気付いたよ。」

「えっ？！」

まるで悪いものでも見られたかのようにビクッと体を震わせるケイン。しかし当のジャックは特に気にする様子もなくあとを続けた。

「出発は一週間後の今日だ。よく考えてみてくれ。」

そう言うとジャックは席を立ち、入口のドアに手を掛け、再び振り返つた。

「ケイン。断るって話なら聞かないよ。」

ワインクをして出て行くジャックをケインはただ黙つて見ていた。

つづく

3ヶ月後。ケインを加えた考古学班、教授のサー・アーサー・ドイルを隊長にした、総勢16名は船酔いに苦しみながらも漸く印度のボンベイに降り立つた。そこでポーターを雇い、車で行ける所まで移動し、その後はただひたすら磁石を頼りに歩くのだ。

「さすがにこつちは暑いな。」

誰ともなく呟いた。

荷物を手分けして持ち、一行はジャングルを目指す。通訳はアーサー教授の教え子でR大学に留学していたリュー・テリーだ。卒業後は故国で英国人相手に貿易の仕事をしながら時折通訳の仕事をしている。

「ええ。みなさんそうおっしゃいます。でもジャングルは暑さよりもいろいろな生き物がいるのでそちらに注意してください。小さな虫でも人の命を奪うものもいるんですよ。それから何といっても一番恐ろしいのはスウォードと呼ばれているトラです。奴は大変獰猛で今まで多数の人間が襲われています。十分気をつけてください。まあ彼に出会うこともないでしょうが。出くわしたなら仕方なく諦めることですね。」

冗談ともつかない言葉でテリーは言った。

「なあケイン。なんかすごい所に来ちまつたなあ。もつと楽にその桃源郷に行けると思つていたのに。」

ケインと肩を並べて歩いて歩いていたジャックが話しかけてきた。元よりそうなのだが、何故かケインはある衝撃のためにジャックの言葉に反応することができなかつた。“デジャブ”である。この光景は以前何かで見たことがある。そう感じていたのだ。いや、しかし・・・。そんな思いを反芻しながらそれでも彼の足はひたすら前に進んでいた。

ボンベイ港到着から数えて1週間目。テリーがしきりにおかい、と呟き始めた。

「リュー君。一体どうしたんだね？」

アーサー教授が立ち止った。

「はい。そろそろ目的地に着く頃なんですが、目印となる標識が全然見当たらないんです。方角は間違つていないハズなんですけれど。

「二人に合せるように一行は足を止めた。

「ともかく一時休憩しよう。」

その言葉に荷物を下ろす者、ミズを飲む者、とくつろいだ空気が流れた。と、その一瞬の隙を奴等が襲つた。スウォードだ！鳥合の衆と化した隊員達の中で誰かが叫んだ。逃げる隊員とポーター達を通常群れでは行動を取らないトラ達が容赦なく追つ。2人、3人と倒れていく仲間達。ケインもまたジャックと隊員である2人の女子大生と共に逃げていたが、木の枝に足を取られて転倒し、そのまま意識を失つた。

彼は薄れていく意識の中で、合図のような口笛を聞いたような気がした。

ジャスミンの部屋

「ジャスミン様。あの者達一体どういたしましょう?」

「カシミール。あの人達はわたくし達の聖なる場所に侵入したのです。だからと言つてあのままにしておけば全員スウォード達に殺されていたでしょう。スウォードは谷の守り神です。無断で入り込めば容赦なく他のトラ達に襲わせるでしょう。でも余計な血を流させるわけにはいきません。たとえ侵入者であつてもです。」

「ジャスミン様。スウォードと言えば少し不思議な事がありました。

「不思議な事?」

「はい。私達が止めに入つた時、何故かスウォードは一人の男の方をペロペロ舐めていたのです。危ない!と思つた私が傍に近寄ると怯えたような目をしたのですが、何とスウォードはその顔に付いた泥を舐めてふき取つていたのです。」

忠実な従僕のカシミールの言葉は、ジャスミンを驚愕させるのに充分であつた。

「カシミール!それは本当なんですね?!.本当にスウォードはその方を襲つていたのではないのですね?」

「は・はい。」

「カシミール。いいですか!その話は絶対秘密にしてください。特に叔父様に知られないよう細心の注意を払つて。いいですね!」

「ジャスミン。一体何をこそこそ相談してある。私に内緒にしておける事などない筈だ。いいや、私の知らない事があつてはならぬのだ!フン!それにしても余計な事をしたものだ。あのままにしておけばこの谷の秘密を知られずに済んだものを。」

ジャスミンの叔父で大臣のヤコブがするそうな目で一人を見た。

「叔父様。わたくしの部屋に合図もなく入つて来られたのは何ゆえ

です？それにたとえ侵入して来た者が悪人であつてもみすみすスウォードに殺されていくのを見逃すわけにはいきません。まして中のお一人は。」

「ジャスミン。今の言葉はどういう意味だ？あの中の一人とは一体誰の事だ？」

「ヤコブ様！皇女様に何をなさるんです！！」

突如脇から甲高い声がした。ジャスミン皇女の侍女、プレーナムである。年はジャスミンと左程変わらないのだが、この谷一番のうるさい型なので、さすがのヤコブも彼女が現れると逃げ出してしまう。

「チッ！嫌な奴が出てきおつた。」

憎憎しげにそう呴くとヤコブは退散してしまった。

「カシミール！あんたつていつも皇女様にくつ付いているくせに、どうしていざつて時に役に立たないのッ！お可哀相に。皇女様を守つてあげられない召使いなんてどっこを探したつていないわよッ！」

「すみません。プレーナムさん。」

「謝る相手が違つてるわよ！」

「いいのよ。プレーナム。わたくしが悪かつたのです。もつと周囲に注意を払わなければいけないのに。ごめんなさいねカシミール。」

「申し訳ございません。ジャスミン様・・・。」

「あんた！この次からちゃんと守つて差し上げてよ！」

「ところでプレーナム。どうかしたの？あの方達についていたのはなかつたの？」

思い出したようにジャスミンが話題を変えた。

「アツ！そうでございましたわ！お一人が気付かれたのでお知らせに来たんです。」

「まあ、どうしてそれを早く言わないの！」

そつ言うなりジャスミンは一人に構わず部屋を出た。その後を影の薄くなつたカシミールと一層大きくなつたプレーナムが慌てて追いかけた。

（一体ここはどこなんだろう。）生き残った隊員、ケイン、ジャック、リュー・テリー、アーサー教授、ジュディー、スージーの6名のうち、まずケインが意識を取り戻した。転倒した際どこかに当たつたのだろうか、頭がズキズキする。

続いてジャック、テリー、教授の順に目を覚ました。ジュディーとスージーは少し離れた所に寝かされていたためまだ目を覚ましていない。

「う・・・。イテテテ。」

ジャックは足を怪我したらしく綺麗に包帯が巻かれていた。教授は気付いたものの、腰をひどく打つたようで起き上がることができない。ケインとテリーが手伝つてようやくソファに寝かせた。その物音にジュディーとスージーが目を覚ました。

「ここは？」

お互いか無事なのを知ると一人は一斉に泣き出した。その声を聞きつけたかのようにドアが開き、3名の人間が入ってきた。2人の女性と真面目そうな男。いずれも年が若そうだ。そして女の子達が声高に泣いているのを見て、片方の女性が一人に輪をかけたような甲高い声でたしなめた。

「お静かに！・・・あなた方は一体どこからいらしたのですか？」

「言葉が通じますよ。教授！」

テリーの第一声。黙つて頷く教授。

「私達は通常の会話は困らぬようつに教育を受けています。あなたの仰つておられる事は理解できます。」

代わつてその男が答えたが、その表情からは何も読み取ることができない。

「私達はイギリスから来た考古学の研究をしているグループです。

私は隊長のアーサー・ドイル。こちらは元教え子で今はこの地で貿

易の仕事をしているリュー・テリー。そして学生であり隊員のジャック、ジユディー、スージー、ケインです。」

一人づつ紹介されると彼らはそれぞれ頭を下げる。

「ケイン？」

中央に立っていた品のいい女性が呟いた。

「助けていただきありがとうございました。それで他の者達は一体・・・」

不自由な体を起こすように教授が続けた。

「私達が止めに入った時には既に殊のこと切れでおりました。」

無表情の男が淡々と答える。

「そうですか。」

それきり教授は目を閉じて黙ってしまった。涙が両目から溢れ出す。自由になる手を胸の上に置き静かに十字を切ると、それに習つように全員が十字を切つた。

「とにかくここは一体どこなのです？そしてあなた方は？」

教授が黙ってしまったのでテリーがその後を引き継いだ。

「ここは芥子の谷と呼ばれている所です。この方はこの谷の皇女、ジャスミン様。そして従僕のカシミール。私は侍女のプレーナムです。」

甲高い声の女性、プレーナムが答えた。皇女、と聞くとすぐジャックが反応した。

「やっぱり！…そうじゃないかと思つてたんですよ。実に美しい。この世の人とは思えない位だ。」

そう言いながらジャスミンに近付く。

「え・・・・・！」

つこちつきまでワンワンなっていたのが嘘のよつた声で女の子達が叫び、代わる代わる文句を言い始めた。

しかしジャックの贅辞の言葉も全く気に留める様子も無く、ジャスミンの視線はケインに向けられたままだ。それに気付くとジャック

はケインをからかった。

「お姫様はハンサムなケインに一目ぼれだつてサ。」

「何を仰るのです！ 皇女様に向かつて無礼な！」

一段とプレーナムの声が上がる。その高揚とした雰囲気にケインの顔に微妙な変化が現れた。それを見た途端、ジャスミンの体がワナワナと震えだした。

「ジャスミン様？」

心配そうにカシミールが声を掛けた。事実、ケインの変化に気付いたのはジャスミンの他にいなかつた。当のケインさえも気付かない。しかもその変化はすぐに消えてしまつたのだから気付かない者を責められはしなかつたのだが。

「い・いいえ。何でもないの。・・・」挨拶が遅れまして申し訳ございません。この国の皇女、ジャスミンと申します。・・・プレーナム、あとは宜しく頼みます。」

涙をこらえながらもはつきりとした口調で命ずると、足早に客間を出て行つた。その後をカシミールがびっくりしたように追つて行く。残されたケイン達は突然我に返つたように動き出した。

2つの月（1）

2週間が経つた。怪我をして動けないアーサー教授の命めいの下、ジャック達はあたり一帯を調査することになった。果たしてこの地は彼らの目指す所なのであろうか？それを当面の課題として行動を起こしたのである。しかしケインの目的はジャックの言った2つの月を探すことである。だがこの2週間、ただの一度も月が2つ昇つたことはない。イギリスと同じ満ち欠けする当たり前の月が1個あるだけだ。ここは自分の求めている場所ではないのではないか、そう感じながらも書物でしか知りえなかつた星をたくさん見つけた。なにしろ南天の星空である。北に位置するイギリスとは全く異なる星々を実際に見ることができて、それなりに彼は満足していた。だがやはり心の奥では2つの月をこの目で見たい！と願つていた。だから彼の行動は主に夜である。その夜も高台で望遠鏡を片手に夜空を眺めていると突然人の気配がした。ハツとして振り向くと思いがけずジャスミンが立っていた。

「！！ジャスミン。どうしたんです！こんな時間に。」

この2週間、何故だか解らないがケインはジャスミンを避けていた。
「・・・あなたとどうしてもお話がしたくて勇気を出して来ました。」

「僕と？」
「ええ。」

思いつめた様な表情にケインは改めてジャスミンを見た。

「・・何からお話をしたら良いのか迷いました。でも1つだけハツキリしている事があります。あなたの額にあるアザの事です。」
(額のアザ？何故その事をこの人は知っているんだ！)

それはケインがここに来た日に顔に現れた微妙な変化の事だった。
「初めてお会いした時、偶然見てしまつたのです。三日月型のアザを。あれは何かの理由で気持ちに乱れが生じた時だけ現れるの

ではありますんか？・・・・・実はわたくし、同じアザを持っている方。いいえ、持っていた方と言つた方がいいでしょ。存じ上げているのです。やはりあなたと同じ形でした。」

ケインが答えないのでジャスミンは言葉を続けた。しかし言葉は発しなくとも動搖しているのがわかる。三日月型のアザがくつきりと額に現れたからである。その事はケイン自身痛いほど感じていた。

「ほら、今も出でているわ。これでようやく2つの月が揃いました。この谷が救われる時が訪れたのです。」

ジャスミンの目には懐かしさの余り涙が溢れている。

（2つの月？どうこう事だ！）

「「めんなさい。また驚かせてしまつたようですね。話せば長くなりますが、この事を話さなければあなたは調査が終わればいづれ帰国してしまうでしょう。・・・実は、あなたとわたくしは魔王でありますわたくしの父、ムファードが決めたいいなずけ同士なのです。」

「え？ 今なんて言いました？」

「あなたとわたくしはいいなずけ同士なのです、と申しました。」

「は・はは。何かと思えばバカバカしい話を。あなたは自分の言つている事が解つていいんですか？僕達はたつた2週間前に出会つたばかりなんですよ。騙すにしてももっと上手い嘘があるだろ？」「これ以上ジャスミンの馬鹿げた話に付き合つていられないとばかりケインは立ち去るうとした。

「あなたのお母様の名前はオピウム。お父様の名前はジェイムズ。と仰るのではありませんか？」

「え？ 何故それを。・・・ああ、ジャックに聞いたんですね。」

「いいえ。の方とはお話していません。ですからその事も含めてお話しなければならないのです。」

一旦立ち去るうとしたものの、彼女の曰くありげな表情にケインはジャスミンに促されるままその場に腰を下ろした。

2つの用(2)

「わたくしの話を聞いて下さるのですね。ありがとうございます。」

言葉を選ぶかのようにジャスミンは深く息を吸い込んだ。その横顔は月明かりに照らされてこの世のものとは思えない程美しい。この谷一杯に咲いている花のようだ、と彼は思つた。

そこで意を決したように彼女は彼の方に向きを変えた。

「……この谷に咲いている花。お分かりですか?これは一面けしの花なのです。その事を心の隅に留めて置いてください。……今から23年前のことです。2人のイギリス人がこの谷に迷い込みました。彼等は探検家でした。徒歩でインド横断をしていた時に道に迷い、何日もジャングルの中を彷徨つた挙句のことだつたのです。2人共怪我をしていたため、わたくしの叔母が看病しました。その甲斐あつて徐々に快方に向かい、歩けるようになつた彼等は生来の探検心が沸いたのでしきう、谷の事を調べ始めました。当時王だつたのはわたくしの祖父でしたから、それに対して初めは目をつぶつしていました。でもある事を境に彼等への態度が変わつたのです。それは2人のうちの1人と叔母との間に恋愛感情が生まれたからです。部外者と谷の、それも王家の者との恋愛など祖父にとつてはもつての外でした。即刻出て行くように彼等は命令されたのですが、頑として2人は聞き入れません。そこで祖父は谷にある財宝を差し出し再度勧告しました。すると1人はすぐ出て行くと約束し荷物をまとめましたが、叔母と恋人になつた方は一生ここにいるからと懇願し、当時皇子だつた父も彼の博識ぶりに感銘を受け、心酔していました。もあつて彼の見方をしました。その甲斐あつてようやくその願いは聞き入れられ、その後1人は財宝を携え、カシミールの父に道案内をしてもらい出て行きました。あとに残つた1人は叔母と正式に結

婚し、父と共に祖父の手助けをすることになったのです。

1年後には2人の間に男の子も生まれ、幸せに暮らしていました。

・ ですがそれから5年後、この谷始まって以来の原因不明の疫病が発生したのです。誰もそれが何なのかわかりません。するとどこからともなくよそ者が入ってきたからだ、という噂が流れたのです。勿論根も葉もない話なのですが、その頃は誰かを犯人にしなければ事態は収まりませんでした。いち早く身の危険を感じたその方は息子である男の子を連れてこの谷から逃れました。」

ジャスミンはそこでふつとため息をついた。今までの話と自分がジャスミンのいいなしけだ。といつ事のどこに関連性があるのだろう。

・

その時サーツと一陣の風が吹き、

「そして・・・」

話を続けようとした彼女の口を突如ケインが塞いだ。

「この・・・しない手はないですよ。」

1人が言つと、

「そして我々は・・・ジャスミン・・・」

1人が答える。風と共に一人の前に現れたのは複数の男だった。しかしその声も折からの風と人の気配に素早く身を隠したせいで、ところどころしか聞こえない。加えて何人の人間がいるのかも、声の調子を落として話しているので解らない。だが1人はジャスミンの名を口にしていた。彼女の様子が気になり横を見ると、恐ろしいのかギュッと目をつぶり、両手でしつかり自分の腕にしがみついてる。その姿はケインの心の奥に暖かいものを湧き上がらせた。

なおも声の主は話し続ける。

「交換条件ということで・・・」

どちらかがそう言つと同時にカサカサという音がして彼等はその場か遠ざかつた。

足音が完全に聞こえなくなるのを待つてケインはジャスミンを促した。

「今のは誰だつたんだろう。わかる?」

しかし余程怖かつたとみえてジャスミンにはケインの言葉も聞こえていない様子だ。しかも小刻みに震えている。彼はその身体を思わずギュッと抱き締めた。

「アツ!!」

「大丈夫。僕が付いている。大丈夫・・・」

ジャスミンの背中を軽く叩きながら慰めていると、先程心の奥で湧き上がつたものが何だつたのかはつきりした形で蘇つた。もしかしたら自分達はジャスミンの言う通り、ずっと前から愛し合っていたのかもしれない。そんな感情に囚われ、不安そうにじつと自分を見

上げてこぬジャスミンの可愛らしさに、と自分の顔を近づけた。

ジュディーとスージー

ケインとジャスミンとの間にかすかな繋がりの芽生えた翌日のことである。ジュディーとスージーがアーサー教授の部屋にいきり立つて入つて行つた。何しろ調査といつても何も無い。荷物は襲われた場所にあることに間違はないのだが、あの恐ろしい光景を思い出すから取りにはいけない。しかもこの谷がインドのどこに位置しているのかも明らかではないので、道具不足、資料不足のまま作業しなければならず、その行為は非常に困難を極めた。

「先生！私達の調査は役に立つてるんですか？！」

年若いスージーが業ごつを煮やし、アーサー教授に食つて掛けた。

「スージー！」

「先輩だつてそう思つてるんでしょう？」

「申し訳ありません。先生。スージーにはちゃんと言つて聞かせますから。」

「いいのだよ、ジュディー。・・・ああ、ありがとうございます。」

自分で身体を起こそうとしたアーサーをジュディーが助け起こした。「スージー。君がそう思つのも無理はない。もつと前に説明しておるべきだつたのだからね。・・・まずここがどこなのか、ということだが。・・・ここに着いてから2日後。ケインが星を見て測量した結果、デカン高原のどこかに位置しているということだ。日数、歩行距離からみてもほぼ間違はないだろうと思つ。・・・そこで君達に質問なのだが。デカン高原といつて思い出すものはないかね？」

アーサーの優しい眼差しが2人に問いかけるように注がれた。

「デカン高原？・・・アツ！もしかすると先生はアジャンターの事を仰つてしているではありませんか？」

先輩のジュディーが答えた。

「おお！さすがはわが考古学教室トップの成績を誇る生徒だね、君は。その通りだよ。今から18年前に私達の先輩によつて発見された石窟寺院だね。復習の意味も兼ねて言ってみなさい。」

アーサーは目を閉じてジュディーの答えを待つた。

「先生！私にも答えて下さい！」

「ところがスージーも負けではない。」

「おおスージー。それでは君が答へなさい。いいかね？ジュディー。」

「はい、もちろんです。」

「じゃスージー。アジャンターのことで君が知つてゐる事を答へなさい。」

「はい！……アジャンターとは元々マハーラシュトラ地方にある村のことで、BC2世紀からAD8世紀頃に作られ、29の石で出来た寺院です。壁画はグプタ美術の粹を表しています。1817年、先程先生が仰つたようにイギリス人の手によつて発見されました。……どうですか？先生。」

「良く出来たね。スージー嬉しいよ。ではジュディー。何か付け加えることはないかね？」

「はい。アジャンターはサムドラグプタ時代に掘り始められました。仏教遺跡ですがインドには仏教徒はあまりおらず、ヒンズー教徒が多かつたと云われています。カースト制度がその代表ともいえるものです。また、シヴァ、ヴィシュヌ、ブラhmaといつ3人の神を崇めているのも特徴的です。」

「ウーーーーム。良く勉強しているね君は。」

アーサーの言葉にジュディーの顔が赤らんだ。

ジュディーはどちらかといえば秀才肌の生徒であまり外見にこだわらない女の子だった。化粧も殆どしないし、遺跡発掘のためなら何日もシャワーを使わなくても平氣である。

一方、スージーはなるべくなら遊びたいタイプで、考古学を選んだ

のも穴掘りさえしていれば単位がもらえる?という安易な考で専攻した所謂 いわゆる 流行 はやり の学生だった。そんな2人だったが、なぜかウマが合うというか、話が合つたらしく、ジュディーのほうが1年先輩にも関わらず仲良くなり、今回の調査隊の一員に加わった。

しかし元々負けず嫌いのスージーの心の中に面と向かつて教授に讐められているジュディーに対抗意識が芽生え、

「先生! そのくらいなら私だつて!」

といきり立つた。だがその言葉を遮るようにアーサーが言った。

「そのアジャンターの近くに先づる全く別の遺跡があるらしい、という記事が出たのだよ。私は今回の発掘でそれを証明しようと思つていたのだ。ただそれがどこなのか、皆田見当がつかないのだよ。」「えつ! それは本当ですか?!

思わず2人は驚きの声を上げた。

ジャックの計画

ジュディー達がアーサーの部屋で思にもよらぬ話を聞いていた頃、ケインは昨夜のジャスミンとの会話をもう一度考えてみようとした。何者かの侵入によつて中断されたジャスミンの話。その何者かが言つていたジャスミン、交換条件、途切れ途切れの会話・・・そういう事が頭から離れずあのままジャスミンと別れてしまつたことが悔やまれ、ベッドに横になつたものの昨夜は殆ど眠れなかつた。もしかするとジャスミンも同じ気持ちであり、この丘に来るのではないか?そして昨夜の話の続きをしてくれるのではないか?という期待もあつた。思わずキスをしてしまつたのは運命なのか、それとも月明かりのせい・・・つまりムーンライトマジックなのか、確かめたい気持ちもあつた。

しかしひょっこり現れたのはジャスミンではなくジャックであった。突然の彼の出現に驚いたケインだが、彼以上にジャックはギョッとしたように立ち止つた。

「ケ・ケイン? 何故ここに?」

「何故つて夜はいつもここに来てたんだけれど、日中はどんな所なのかと思って来てみたんだ。」

咄嗟に嘘をついた。

「そ・そ・うか。」

「君こそこんなに朝早く何をしているんだ?」

「俺?・・・・君に見つかったのも何かの縁だな。仕方ない・・・いいが、ケイン。これから話す事は教授達に内緒にしていれくれ。絶対に!・!」

そう言つたジャックの両手が急にギラギラしてきた。それに圧倒されケインは思わず頷いた。

「・・・俺達はイギリスを立つ前、ある計画を立てていた。俺達というより教授が、と言つた方がいいかも知れない。実は今から18年前、イギリス人がアジャンターという所で石窟寺院を発見したんだ。」

と、アーサーがジユディー達に話した内容をジャックは説明した。
「・・・それを探す為のインド行きでもあつたんだ。ただ君の参加を何故教授が言つてきたのかは全くの謎なんだが。たとえ天文学的見地から2つの月の存在を証明する。といつても他の生徒でも良かつたはず。なのに何故か教授は君を、つまりケイン・スタンフオードを!と指名してきた。ところがいざインドに来てみるとあんな悲惨な事が起きてしまった。教授もショックを受けてこのまま帰国しようか、という気持ちになつたようだつた。けれど君の話で俄然やる気が戻ってきたんだ。」

「僕の話?」

「ああ。君の説明からするとこの辺りはデカン高原の一部だそうじやないか。教授はそこに目を付けたのさ。デカン地方の中なら可能性はある、とね。そこでこの谷の住人に手伝つてもらつて、まあ殆ど道案内と言つた方がいいかな。彼等とあちこち探したんだ。リューサンも初めのうちは昔の経験を生かして調査に加わつていたんだけれど、仕事に関する何かがあつたということで途中から離脱してしまつた。だから実質俺とジユディーとスージーの3人でやつているというわけさ。もっとも彼女達には詳しい話をしていないから一体何を探しているのか五里霧中の状態だと思う。それにあの2人はまだ実践的な作業が豊富じやない。つまり机上の空論の域を出でない。そこで教授や彼女達に内緒で俺は1人調査しようと考へた。だから一昨日からこうして昼夜問わず動き回つてゐるんだ。」

「昼夜問わず?じゃあ昨夜も歩き回つていたという事かい?」

もしかすると昨夜の人物のうち、1人はジャックだったのかも知れない。そんな疑念が頭の隅をよぎつた。

「昨夜?ああ勿論さ。ここから5キロ程離れた所で天氣も良かつた

から野宿してたんだ。遠くの方で獣の鳴き声がしたが、まさかあの
トラ達じゃないだろうな、なんて考えてたら知らずに朝になつてた。
- - - - いいかケイン。発掘には単独行動は禁じられているんだ。
だから俺がこうして動いていることは絶対黙つてくれ。頼むよ
！」

ジャックの答えにホッしながらも、じゃああれは一体誰だつたん
だろう？その疑惑が再びケインの心に頭をもたげてきた。心ここに
あらずといった状態でケインは「分かった。」とだけ答えた。

ムファード王

その頃ジャスミンも昨夜の事を思い出しながら、元王であり父のムファードの寝室にいた。ケインの事を報告するためである。

ムファード王は2年前に病氣で倒れて以来、寝たきりの状態になってしまったが、脳には影響がなかつたらしく言葉もハツキリしている。だが身体が思うように動かない為以前のように政務を全うすることができない。大臣で義弟のヤコブが代行しているのだが、最近王の椅子を密かに狙っている、との噂を耳にしてからはムファード王はジャスミンに良い婿を、と考えていた。そんな矢先、もしかするとオピウムの息子かもしれない、という男が現れた。その男、ケインの一拳一動を逐一報告するように、とカシミールに命じてあつた。しかしその事はジャスミンには知らされてはいなかつた。

ジャスミンはベッド脇の椅子に腰掛けた。

「お父様。『機嫌いかが?』

彼女の声はカナリヤのように美しく、聞く者全てに安らぎを与える。「おお。ジャスミン。今日のお前は一段と美しいの。何かあったのかね?」

「い・いいえ。あの・お父様に『報告申し上げたいことがありますてこのような時間も顧みず来てしました。』

その頬がほんのりと赤らんだ。

「何だね?」

父、ムファードの問いに昨夜のケインとの会話を搔い捨てた。但し、正体の分からぬ人物とその後のケインとのキスは除いて。しかしジャスミンの報告は既にカシミールから全て聞いていた王は、愛娘の話を二度二度と聞いていただけだつた。

「それでお前はそのケインという男に何時^{いつ}全てを話すのだね?私は早ければ良いと思うのだがね。そうすればお前の身は守つても

うるうだらうし、オピウムもきっと天国でそれを望んでいるだらう。

「昔を思い出すかのように王は遠くを見つめた。

「でもお父様。 あの方が叔母様の実子おこだとハツキリしたわけではないのですよ。」

不安そうに自分を見つめるジャスミンに王は言った。

「大丈夫。 お前の話を聞いてケインとやらがオピウムの忘れ形見であることがはつきりしたよ。 お前は先程ケインの瞳が綺麗は緑色だつたと言つたね。』 私があの子を最後に見た時も深い緑の色を放つておつた。 知らない国へ行くという不安さえも感じない位に。 決定的なものが額のアザじや。 お前も知つての通り、 オピウムは左の二の腕に三日月のアザを持つておつた。 ケインは父親より母親の血をより強く受け継いでいるようだ。 ··· そうか··· ケインという名前であの子は大きくなつたのじやな。 私の知つていた名前は、 ブマーマグプタであつた。 星座に興味を持つよに、 とインドの学者になぞらえて私がつけてやつた名だ。 その名の通り星に興味を持つたのじやな。 ··· ··· よしよし。 ジャスミン。 私の口からケインに話そう。 お前の事も頼んでおきたいからの。 ケインを呼んでおくれ。 なるべく早くじやぞ。 ··· それからお前は席をはずしていなさい。」

「はい。」

父の命令でジャスミンが出て行くのを確認したのかカシミールが音もなく王の寝室に入った。 しばらくしてジャスミンに呼ばれたケインが同じように入つて行つた。

それから3時間後。 王の容態が急変し、 突如意識不明に陥つた。 知らせを受けたジャスミンは、 すぐ王の容態について絶対極秘にするよう臣下に申し渡した。 お陰でその件はごく一部の人間のみが知ることとなつた。

王の容態が進展せぬままいたずらに時は過ぎ、4ヶ月が経つた。大臣でありジャスミンの叔父、ヤコブはムファード王の容態が良くないらしいということを薄々感じたらしく、自分が次期王であるということを表立つて口にするようになった。ジャスミン一人の力ではどうにもならなくなる程に。そんな彼女の唯一の支えはやはりケインの存在だった。いつでもさりげなく傍にいてくれる、それだけで救われた。ケインもジャスミンから聞いた話を全面的に信じたわけではなかつたが、誰かが彼女を狙つているということは紛れもない事実なので、できるだけ彼女の傍から離れないように努めていた。それまでジャスミンに仕えていたカシミールとプレーナムもケインが信用のにおける人物だとみなすと、ケインの荷物を勝手にジャスミンの部屋に持つて来て寝食を共にし、彼女を危険から守つて欲しいと懇願した。さすがに同じ部屋は困ると辞退したケインだったが、「皇女様のお命には代えられません!」と、じつに実のある説得に根負けし、その夜からジャスミンの部屋で生活を共にすることになった。それで一層お互いのことがわかつた。ケインは自分の出生、両親、額のアザの事等をジャスミンの口から聞くに及ぶと益々彼女との深い繋がりを痛感した。

一方ジャスミンは小さい頃より父王から詳しい話を聞かされていたので、既にまだ見ぬ男性に恋をしていた。実際ケインがその人らしいと解つた途端、自分の一生を捧げる人だと感じた。寄り添つて歩く2人の姿は微笑ましく、彼等を見た者達に安堵の気持ちを起こさせた。それに対してもヤコブは苦々しく思い口を挟んできた。よそ者のケインに対する待遇が気に食わないらしい。しかしヤコブのあからさまな態度も今のジャスミンにとっては全く気にならないようだ。政務が終わると必ずケインに寄り添い、王の部屋で意識の

ない父に話しかけながら時を過ぎるようになっていた。

またケインにとってはヤコブのジャスミンに対する態度が不安材料ではあったが、取り立てて何をされたという訳ではないため、周囲に注意を払いながら不穏な日々を送っていた。

そんなある日。1人の不可解な行動がカシミールによってケインにもたらされた。

「テリーさんが？」

「はい。あの方は貿易商だと伺いましたが。」

「ああ。僕はここに来てから知ったんだが、教授の教え子でジャックも信頼のおける人だといつてた。そんな人がどうして。」

ケインの顔には信じられない、という色が現れている。

「私は当初より皆様方の行動を逐一王に報告しておりました。するとテリー様の動きがおかしいことに気付いたのです。そして配下の者に命じずつと尾行させておりました。」

「報告？といふことは僕を含め他のメンバーの事も報告していたのか？」

不快そうに顔を歪めるケイン。額のアザが薄く浮き上がる。

「申し訳ありません。ですがこの件に関しては皇女は全く関与しておりません。」安心下さい。」

ジャスミンは関係していないといふことがわかつてホッとしたものの、別の疑惑が湧きあがつた。

「ということはあの夜も僕達を見ていたといふことか？」

「あの夜？・・・僕達と申しますと・・・アア、あの夜の事で『』ぞいますか。はい。ですがお二人が何を話し、何をしていたかは全く覚えておりません。はい。神に誓つて。」

「覚えていないといふことは既に王に報告済みといふことか・・・仕方ない。そのお陰で僕はこの谷の人たちから良くしてもらつてゐるんだから。・・・・・！」といふことはあの男達も見たのか？！」

「はい。私は風上に潜んでおりましたので奴らの顔ははっきりと見ました。けれど話の内容は残念ながら聞き取ることができませんでした。」

「誰だつたんだ、そいつらは！」

「一人でした。お一人はヤコブ様。そしてもうお一人はテリー様で

した。」

思いもよらぬ名前が出てケインはショックを受けた。

「大臣とテリーさんが！・・奴らはジャスミンと言つた。しない手はない、とか交換条件という言葉も聞いた。だが僕が聞いたのはそれだけだった。一体奴らは何を企んでいるんだ？」

「そこなのです。ヤコブ様は以前より現王の後^{あと}目^めを虎視眈々と狙つておりました。叔父と姪という間柄でありながら皇女と結婚して王になろうとしていたのです。ところが王は許しません。勿論皇女も叔父であるヤコブ様を嫌つておりましたので今まで手を出せませんでした。ところが何故かあなた様方がいらっしゃつしゃつてからというもののヤコブ様の力が増大してきたのです。 力・・・と申しますても財力にという意味です。私達が調べましたところテリー様の力をもつてすれば可能であることがわかりました。

ケイン様。この谷の花が何であるか皇女にお聞きになられたでしょう。ここは芥子^{けし}の谷と呼ばれている程見渡す限り芥子^{けし}の花が一年中咲いております。その花が最近異常に減つてているのです。それがどうもテリー様が花を大量にイギリスへ流しているためらしいのです。この花は薬にもなるのですが、一方では毒にもなり、悪用しますと人間を生きる屍^{しがばね}にしてしまうそうです。またとても高い値がついていると伺いました。ジェイムズ様が私の父に教えて下さったのです。清の国へ旅をなさつた折、そういう人たちを数多く見たのでその悲惨さもよく知つていると悲しげに話しておられたそうです。その花をどうやらテリー様が金儲けのために本国へ売買しているらしいのです。」

「父からその話は聞いたことがある。しかしテリーさんは花をイギリスに運んで一体どうするつもりなんだろう？・・・・・まさか、イギリスに広めるつもりじゃ！ カシミール！ のんびりしている場合じゃない！ 急いでテリーさんのやっていることを突き止めて止めさせなければ！」

急いでその場を立ち去ろうとするケインをカシミールが引き止めた。

「お待ち下さい。テリー様については配下の者が引き続き調査しておりますので結果を待ちましょう。それよりも一つ。あなた様にお知らせしなければならないことがあります。」

「僕に？」

「はい。とても重要な事。ジャスミン様のことです。」
カシミールの意味ありげな言葉にケインの額に三田畠のアザがはつ
きりと現れた。

ジャスミンの秘密

「これから話す事はあなた様の将来にも関わる事ですので注意してお聞き下さい。ただ皇女にはどんな事があつても知られる事のない様おねがいいたします。」

カシミールの声の調子が変わった。

「秘密の話を僕が聞いてもいいのか？」

「あなた様だからこそ打ち明けるのです。 - - - 私の家は代々王家に仕えてきました。前王から私の父はお側に上がっておりました。ケイン様。皇女はムファード王の実のご息女ではございません。王には子種がなかつたのでござります。少年の頃の病が元で子供を作る機能が失われ、王妃は王公認の下、隣国のあるお方と数回寝所を共になさいました。それで皇女が誕生したのです。今から18年前のことです。既にその時ケイン様とジェイムズ様は本国に帰られた後でしたので、ジェイムズ様もその事はご存知なかつたはずです。しかしそれは絶対漏れではならぬ事でした。知っていたのは王と私の父と王妃出産の折お側に仕えておりましたブレーナムの母のみでございました。その後ジャスミン様は何も知らず王の愛娘として幸せにお育ちになられました。王妃は出産後公認といえど王以外の殿方の寝所を共にした、という罪の意識に苛まれ聞もなく崩御なさいました。ですから現在事実を知っているのは王、私、ブレーナムの人だけなのです。」

カシミールの一言一言はケインにショックを与えて続けた。

「・・・・・こんな極秘事項を何故僕に話した？」

驚きの余り、声が掠れているのが分かる。

「父の遺言でござります。」

「遺言？」

「はい。王がどんなに皇女を可愛がろうと王家の血筋を引いた方は

オピウム様のお子様ただお1人、つまりあなた様なのでござります。その事はずつと王も認めておられました。無論私の父にしか打ち明けなかつたそうですが。そこで王と計らい、将来ケイン様、当時はブマーマグプタ様でした。をジャスミン様と娶めあさせて王家の血筋を存続させるという計画を立てたのです。問題はブマー様、つまりあなた様がこの地を訪れることがあるかどうか、ということでございました。そこで父がジェイムズ様と一緒にこの地を訪れ、一足先にイギリスに戻られた方、バーナード様を数年かけて探し出し、何とかブマー様をここへ来ていただくよう仕向けて欲しいと懇願いたしました。詳しい話は私も聞いておりませんのでどのようにしてバーナード様が話されたのか分かりませんが、とにかく上手くいった旨の手紙を受け取り嬉々としていた父が突然倒れ、三日後に亡くなつてしましました。その死の直前、私は枕元に呼ばれこの話を聞いたのです。今度この地に足を踏み入れる方がブマー様ご本人と確認したら、この秘密を話すよう申し渡されました。あの時のトラ。スウォード達は私の命令で皆様方を襲つたのです。」

「何だと！！それじゃお前は僕をここに連れてくるためだけにあの人達を殺したというのか？！」

「罪は私1人あります。皇女は今でもあなた方が不法にこの谷に侵入して來た為スウォードに襲われたと信じております。全て私1人が計画したことです。」

若いが決して意思を曲げない強さがそこにあった。いつもブレーナムに怒鳴られてシュンとなつていた、あの気弱なカシミールはどこにも見受けられなかつた。

しかし怒りが全身を覆つてゐるケインには終始冷静なカシミールがいやそれ以上にそんな計画にむざむざ引っかかつてしまつた自分が許せなかつた。

「ウオオ――！」

腹の底から搾り出すような叫び声を上げると、ケインは忠実な従僕

の顔に鋭い一発を浴びせ走り去った。見るうちに紫色にはれ上がった。

残されたカシミールの顔が見

ジャスミンの危機

ジャスミンの部屋では氣の早いプレーナムがケインとジャスミンの婚礼の準備に大わらわで、衣装はあれがいいとか部屋も変えたほうがいいとか、一人で何やら忙しそうにしている。

「姫さま！ そんなにのんびりやさんじゃケイン様に嫌われますよ…」「プレーナムが早すぎるのよ。 そうなると決まつたわけじゃないのに。」

「あ～～～ら、宜しいんですかあ？ そんなこと仰つて。ケイン様がいらしてからと、いうもの言葉に出さなくつたつてみ～～～んな知つてますよ。姫さまがケイン様のことをどう思つてらつしやるのか。それにケイン様だつて満更でもないご様子ですしイ。」

「だつてまだはつきり仰つていただいてないし…」

ジャスミンの顔が真つ赤になり言葉もしどろもどろになつてている。「はつきり？ はつきりって何の事です？」

プレーナムはジャスミンが何を言いたいのか解つていたが、ちょっとしたいたずら心が顔をもたげてきた。

「あ・あの・・結婚して・・欲しこって・・」

ジャスミンの声にならない声にプレーナムはニコッと笑つた。

「あ～～～ら、な～～～るほどお。じゃあ今からケイン様のところへ行つてその言葉を言つて頂きましょう！ 姫さまはケイン様の態度がはつきりしないのでうじうじしている！ と私が申し上げますわ！ ササッ！ 行きましょう！」

プレーナムはジャスミンの返事も聞かずその手を取つて部屋を出ようとした。

その時、何者がが2人の背後から襲いかかり布切れで口を覆つた。アツという間もなく彼女達は悪者の手に落ちてしまった。

ケインの心

意外なカシミールの告白に怒り心頭に達したケインは、宮殿を飛び出しがむしゃらに走った。今までの事は全て仕組まれた事だつたのか！カシミールはジャスミンは知らぬ事と言つたけれど今の彼にはその言葉を素直に信じる事ができなかつた。自分のジャスミンに対する想いさえも。

どの位走つたのだろうか。ふと気がつくといつもの場所、エローラの丘に来ていた。どこをどう走つたのかさえ記憶になかつた。とつとう力尽きてケインは倒れこんでしまつた。

（一体自分は何だつたのだろう？）その一言が頭の中を回転木馬のよう駆け巡つていた。

やがてうつすら目を開けるとあたり一面芥子の花^{けし}・・・こんなことがずっと昔もあつたような気がする。・・・・自分がまだブマーと呼ばれていた頃・・・・綺麗な女の人叱られて一人泣きながら家を出た事があつた。あの時は同じ位の男の子たちにいじめられ、その女人に泣きながら話した後のことがつた。何と言つたんだろう？・・・・よそ者？そうだ！僕はよそ者と言われあの女人に興奮して喋つたんだ！その側には・・・父さん？するとその女人は・・母さん・・じや、あの女人が僕の母？・・ブマー？何故今僕はブマーと呼ばれていた頃と思つたんだろう？・・・ブマーという人は星のことを勉強していた学者でその人の名前をつけた・・・僕に？・・・すると僕は・・・ケインの臉^{まぶた}の裏に今はつきりと両親の姿が映し出された。自分は、自分の母親はカシミールの言つ通り、ムファード王の妹、オピウムだつたのか？・・・小さい頃母親について父ジエイムズに問い合わせたことがあつた。どうして僕にはママがないのか？一体僕のママはどんな人だつたのか？etc・だが父の答えは『お前の母は美しく、優しく、それでいて凜とした性格

の人だつた』とだけ。しかし一度だけケインが片親だという理由でハイスクールの先生から厭味を言われた時、

『『Jの子は由緒正しい家柄の子供です。』

と言いついたのである。その時は父独特のはつたりだらうと氣にも留めなかつたのだが、今となつてみればそれは眞実だつたのだ。ともかくその当時は父の言葉でケインは救われたのだった。

自分は芥子の谷の王族の一員だつた。しかも唯一現王ムファードの血の繋がりのある・・・現実を直視しなければなるまい。しかしその為に何人もの人間が犠牲になつた。その罪を一生背負つていくことが自分に出来るのだろうか・・・過去から現在までの記憶が走馬灯のよう駆け巡つていた。

フツと氣が付くと辺りは薄暗くなつていた。知らないうちに眠つてしまつたようだ。しかしそのお陰で大分気持ちも落ち着き、いつまでもこんな風にしていても何も始まらないと思い直した。だがこれからどうすればいいのか全くわからない。カシミールの顔を見ると思うと腹が立つが、ひとまず宮殿に戻つて今後のことを考えようと思つと重い気持ちを奮い立たせるように帰途についた。

宮殿に戻つてみると何やら様子がおかしい。侍女たちがソワソワしている。

何かあつたのか?と尋ねると、プレーナムの姿が見えないという。いつからだ?と重ねて聞くと、午後、皇女の部屋で婚礼の準備があるからと急がしそうにしているのは見たが、その後ブツツリと姿が見えなくなつてしまつたとの答え。辺りを見渡すと、家臣達の様子も変だ。再びケインは彼等に尋ねた。どうしたのか?と・・・異様な胸騒ぎがする。問われたのがケインだとわかると、ホッとしたよつに逆に聞かれた。

「皇女はどちらにいらっしゃるのです?ずっとお探し申しているのですが、どこにもいらっしゃらないのです。政務が滞つて仕方ありません。」と。

「僕は一緒じゃない。」

その一言が家臣達に大きな衝撃を与えた。皇女とプレーナムに何かがあつた!途端に宮殿中色めき立つた。

外は既に闇の世界。外出すれば彼等の身に危険が迫る。ケインも改めて宮殿中隈なく捜した。だがいない。

闇の世界が終わりを告げる頃になつてもまだ見つからない。

(どこに行つたんだ。ジャスミン!)

意氣消沈してソファに座り込むと、一挙に疲労感がケインの身体を襲つた。

(だがこうしてはいられない!ジャスミンの身に何かあつたら全て僕のせいだ!)

再び立ち上がるが気持ちばかり焦つて考えがまとまらない。

「ケイン。どうしたのじゃ?」

そんなケインの気持ちを知つてか知らずかヤコブが眠そうな目をこ

すりながら近寄ってきた。

「ジャス・・・いいえ。何でもありません。」

ケインはそのまま立ち去ろうとした。

「ジャスマシンがどうかしたのか?」

まるで昨夜からの騒ぎは全て知っているぞ、といわんばかりの囁つきだ。

「ご存知なのですね?知っているのに何故お尋ねになるのです?」

「私は当て推量で申したまでの事。それではやはりジャスマシンの事でシナリオの行方を捜すのだ!」

「昨日の午後から姿が見えないのです。フレーナム共々。」

「何だと!何故それを早く言わんのだ!ジョジョ!すぐに皇女とフレーナムの行方を捜すのだ!」

召使いのジョジョに一喝すると、自分も捜すからとケインの前から足早に立ち去った。

「ン？・・・」は・・・アツ！姫様！ジャスミン様！…」素早く辺りを見回すと、すぐ側に青ざめた顔のジャスミンが横たわっていた。

「ジャスミン様！しつかり！」

慌ててその身体を揺すつてみると、ゆっくりとジャスミンの瞼^{まぶた}が開いた。

「ああ！お気が付かれましたか？良かつた！」

感激の余りプレーナムの目には涙が溢れている。

「プレーナム？・・・ここは・・・」

「わかりません。でも私達は何者かに連れ去られたのだと思います。

「連れ去られた？」

途端にジャスミンの身体が震え始めた。エローラの丘でのあの男達の会話が頭の中で蘇^{よみがえ}る。

『ジャスミン・・・』『交換条件・・・』自分達は何者かの餌食になつたのだろうか？その姿を見て、自分がしつかりしなくては！と思つたのか、プレーナムがいつもの彼女に戻つた。

「大丈夫ですか！このプレーナムが付いております！皇女様に指一本触れさせるものですか！」

「おお、相変わらず威勢がいいのぉ。」

突然背後から男の声がした。

「キヤ　　！」

二人は思いつきり叫び声を上げ、お互^いをギュッと抱き締めあつた。

「そんなに驚かずとも良い。」

「ヤコブ様！」

「叔父様！」

同時にその名を呼ぶ一人。

「ヤコブ様！これは一体何の真似です？！私達を早く帰してください！」

「ブレー・ナム。ここでそちの威勢のいい声を聞いても誰もびくともせぬぞ。それにお前達は生きてここから宮殿に帰ることはないからの。フフフフフ。」

ヤコブの笑い声は一人のいる洞穴一杯に不気味に響き渡った。

危うし—ジャスミン

生きて帰ることは出来ない？ ヤコブの言葉に再び2人は恐怖に慄いた。それでもプレーナムは気丈に立ち向かう。

「ヤ・ヤコブ様！ このお方はあなた様の姪でもあるのですよ！ そして現王のたつた一人のお子様です！ その方に向かつてこの扱いは無礼以上の何ものでもありませんよ！」

「ホウ！ この後に及んでもそのようなセリフが言えるとは。さすがプレーナム・・誉めてやろう。だがそのような戯言もこれまでだ。なぜならそなた達の消息が絶たれてから既に3日経つてある。みな必死になつて捜しておるが、何の手掛りも掴めないのだからのおソレッ！」

その言葉を合図に現れたのはヤコブを主とする反ムファード派の数名の男達。谷にはムファード王支持者が大半を占めている中、ヤコブを支持する者もいた。特に近頃になつてヤコブの財力が増大するにつれ、少しずつではあつたがその数に変化が現れていた。その連中はジャスミンとプレーナムにどつと襲い掛かり、あつという間に縄で2人を縛り、石柱に括つてしまつた。

「何をする！ 無礼な！」

プレーナムの声が興奮の余り一段と高くなる。

「おい！ 何をしておる。早く猿轡さるじつわを噛ませろー！」

ヤコブの叱責が飛ぶ。

「大臣。女性に手荒な真似はいけませんよ。」

その時、また別の声が響いた。

「テリー様！ ・・・・・ ジュディーち・・・ま？ 何ゆえあなた方が

？！」

「大臣。そんな風に女性を拘束しばつては失礼ですよ。どうですか？ 方法を試されては？ 一度見たいと仰っていたではありませんか。」

声の主はリュー・テリーだつた。ジャックたちと一緒に発掘をしていたはずの彼が何故ここに？しかしその顔は宮殿で見た時とは打つて変わつた冷酷なものだつた。しかもジュディーまでもが一緒に何故……？

テリーはジャスミン達を全く気にせずヤコブに話しかけた。ジュディーは気が咎めるのかその陰に隠れ顔を背けている。

「テリー。おお！ そうじゃ。そちの言う通り、あれを見てみたい！ じゃがここに出来るかの？」

「大丈夫でしょう。この2人だけにして出入り口を封鎖すれば、あとは時間が経つのをじっと外で待つていればいいのですから。」

「おお！ ・・・ それではそなたに任せよう。じゃが生きてこの2人を帰すわけにはゆかぬぞ。企てを知つておる。」

「えつ？！ テリー！ 話が違うわ！」

それまで黙つていたジュディーが叫んだ。

「ジュディー。僕に強力すると言つた時から君も同じ穴のムジナなんだ。さあー急ごう！ ぐずぐずしていると人が来る！」

そう言つとテリーはすぐ指示を出し、2人の回りに数個の香炉を置いた。何やら煙が立ち昇つている。

「急いでここを出るんだ！」

その声と共にどつと入口に向かうヤコブ達。

「さあ！ 君もだ！ こんな所でアヘンの毒にやられたくないだろ？！」

「アヘン？！ この煙はアヘンなのですか！」

「フレーナム。君は噂通りの優秀な侍女だね。たっぷり煙を吸つてそのまま死んでいただこう。」

嫌がるジュディーの腕を無理やり引っ張ると、テリーは入口に走つた。

ゴホゴホ！

他に人がいなくなると、急激に煙が2人を覆い始めた。

「フレーナム？」

不安に慄くジャスミン。

「姫様！大丈夫です！きっとケイン様が助けに来て下さいますよ！お気を確かに！それにしても3日間も気を失っていたなんて不覚でした。

いいですか。煙は上に昇ります。なるべく・・・こうして下の方に身体をずらして・・・そつそつ、じつとして動かすに。動けば風が起こって煙の回りも早くなります。じつと・・・そう。そのままで・・・姫様。お城に戻つたらおいしいものをたっくさん頂きましょうね・・・」

そう言つたブレーナムの目に涙が光つた。

一刻一刻と洞穴ほらあなを覆つていぐアヘンの煙・・・

危うし！ジャスミン！どうなる？ブレーナム！

ジャスミンとプレーナムが消えてから3日経つてもその消息は杳として掴めなかつた。ケインの心に苛立ちと藁にもすがる思いが錯綜していた。ジャスミン達がいなくなつてからといつもの、何度もなくエローラの丘に登つた。初めてジャスミンと心の琴線が触れたこの場所に来れば、何かしら手挂りが掴めそうな気がするからだつた。しかしその都度絶望感に襲われた。

ところが今回ばかりは違つていた。信じられない事だが、まだ午前中だというのに、天空に一際明るい星が現れたのだ。日差しも眩しいくらいだというのに・・・。南の空でこんなに明るい星といつたらカノーピスしかない。それにしても日中、星が見えるなんて！ひょっとしたらジャスミンの消息が判るかもしれない！そんな奇跡が起こっても不思議はない！そんな気がしてケインは逸る心を抑えながら走り出した。

丘を下つたところで彼の足が止まつた。トラだ！1頭・・・いや、数頭のトラがじつと彼を見つめていた。真ん中にいるトラがグルグルと喉を鳴らし、じりじりと近付いてくる。万事休す！ジャスミンを捜し出す前に自分が殺されてしまつ！思わず目を瞑つた。

- しかし、何も起こらない。それどころかそのトラが彼の手をペロペロと舐め始めたのだ。ハツとして目を開けると、それに気付いたのかトラは「ゴロン」と横になり、腹を上に向けた。撫でてくれ、とでも言つているようだ。それは獸にとって絶対服従を意味するのではないか。

「スウォード？」

スウォードは名前を呼ばれると猫のよつな鳴き声を出して甘えてきた。体は大きいが、ケインの前では子猫のよつだ。

「スウォード。僕がわかるのか？ そうか。撫でてやりたいが今は

それどころじゃないんだ。ジャスミンがいない。お前に言ったところでどうしようもないけれど、一緒に搜してくれないか？」

理解するはずもないと知りつつ、すがる思いでスウォードに語りかけた。するとケインの必死の思いが届いたのか、スウォードはブルツと体を震わせ立ち上がった。その日は甘えていた時とは異なり、既に猛獸のものになっていた。

「ウォン！」と一声上げると、まるでケインについて来い！と言わんばかりに服を引っ張った。

「危ない！…」

突然後ろから声がした。ジャックだった。彼はジャスミン達を捜すうち偶然この丘にやつて來た。その時ケインがトラに囲まれているのを見て思わず叫んだのだった。ジャックの声に1頭のトラが身構えた。

「大丈夫だ。…スウォード達は仲間だ。…まあ行こう！」

ケインの言葉にスウォードが走り出した。それに続くケインとジャック。時折スウォードは距離を測るように立ち止まる。2人の速度に合わせるかのように。

走り出して間もなく道は険しくなりジャングルに入った。普段なら絶対足を踏み入れてはならない所だ。そう兵士に教えてもらつた。しかし今はジャングルの王、スウォードがいる。何も恐れる事はないのだ。

時間にすると「～8分も経つたるうか、一段と木々が鬱蒼とし

た場所で不意にスウォードが立ち止まつた。

「ど・どうしたんだ？」

ハアハアした息使いでケインが聞くと、スウォードはケインの袖を銜え前に押し出した。そこには明らかに人の手によつて隠されたと思われる石の扉があつた。

「ここを開けるといふのか？」

再び甘えるようにケインの手を舐めるスウォード。了解の意味で頷くとケインはその扉を押してみた。しかしひくともしない。ジャックの手を借りてようやく開けることができた。

むつとするような臭氣。恐る恐る彼等は中に入つて行つた。中は薄暗く、奥に進む程、臭いがきつくなる。2人はいやな予感に襲われ先を急いだ。すると一本の石柱に身体を縛られ氣を失つているジャスマシンとブレーナムの姿が目に入った。

「ジャスマシン！」「ブレーナム！」

ケインはジャスマシンの、ジャックはブレーナムの縄を急いで解き、そのまま抱き上げて外に出た。

「ジャスミン！ しつかりするんだ！ 僕だ！ ケインだ！」
気が狂つたようにケインはジャスミンの身体を揺すつた。（神よー）
ジャックも同じようにブレーナムの身体を揺すつてゐる。

「ハロー、ナム！」しかし、カリシゼ！」

八一
・・・
ア、

「大丈夫だ。ケインが助けた。」

「ハア・・・良かつた・・・」

ジャックはプレーナムの背中をさすつてやつた。しかしジャスミンは必死のケインの呼びかけにもかかわらず意識が戻らない。反応さえしないのだ。（どうすればいい？）ケインはジャックとプレーナムの存在も忘れ、想いの全てを込めてその細身の身体をギュッと抱き締めた。（どうか助かってくれ！）

ピクッときりんの唇が震えた。気付いたのか？抱き締めた腕に更に力がこもる。

可愛らしさに磨かれて

素早くジャスミンの額にキスをす。 (ありがとうございます。)

「ケ・イ・ン?」

力の入らない腕でジャスマシンもケインにすかりついた。たかその腕もすぐだらりと下に垂れてしまう。

「僕が悪かった・・君から目を離してしまつた僕が・・
ケインの腕の中でジャスミンは違う、というように微妙に首を振つ

た。

「いいえ。私が油断したのがいけなかつたのです。」

弱々しいがプレーナムも調子を取り戻しつつあつた。

「とにかくここから出よつ。ケイン！お姫様を頼む。俺はプレーナムを連れて行く。さあ！」

ジャックはプレーナムに背中を見せ、背負つていくという仕草をした。しかしプレーナムは一人でいける、と立ち上がつた。だが歩く事が出来ず、結局ジャックの背中に身を任せた。

ケインは最初から決めていたようにジャスミンの腕を自分の首に回し、そのまま抱き上げた。

道案内はずつと表に潜んでいたスウォードである。他のトライ達はいつの間にか姿を消していた。

九天の中の最上の天

アヘンの香炉を設置したヤコブ、テリー一派は素早く洞穴を離れ、それぞれの場所に戻った。

（あとは時間が全てを解決してくれる。）全員がそう思っていた。更に3日が経った。ジャスミン達が姿を消してから6日後のことだ。ヤコブは政務に戻つても自然に顔が綻んでくるのを禁じえなかつた。（もうじきこの谷は私のものになる。王は具合が悪いようだし。もし仮に平癒したとしても以前のようには戻れないだろう。でなければジャスミンと同じ方法で始末してしまえばいい。フフフ）家臣もいつになくヤコブが上機嫌なので、おかしい。と感じつつ、各自（おののの）の仕事に従事していた。

テリーは自分の仕事に寸分の狂いはないはず。と確信していたので未来は前途洋々、次期王であるやつと手を組んだ今、恐れるものは何もないと有頂天になっていた。邪魔者は消した。ジュディーにはたっぷり甘い汁を吸わせてあるからまず裏切る心配はない。仮に裏切つたとしても俺には最後の手段がある。案ずる事はない。あるいは輝かしい未来だけだ。

「テリー。何故皇女達をあそこに閉じ込めたの？！」

テリーの自信を打ち砕くようにジュディーが問い合わせた。

「ジュディー。俺は皇女達に對して何の感情も持つてはいない。あくまでもビジネスとしてヤコブに従つたまでだ。この一面に咲く芥子の花を全て売りつくしてやる！」

「売りつくすですって？！一体どこに売つているの？」

「知りたいか？なら教えてやろう。君はもう仲間だからな。君も俺なしでは生きてはいけないだろう。え？ そういうのか？」
テリーの指がジュディーのうなじを這うように撫でる。

濃厚なキスの後、耳元で甘い声で囁かれてしますと、先程の勢いは

ビニケやらジュディーはうつとりとなってしまった。引き続きテリーはジュディーの髪をもてあそびながら囁いた。

「あれは全部^{しふ}清の国に持つて行くのさ。^{しん}清ではあれは高く売れる。もう少ししたらここ^こを引き^ひ払つて2人で^{しん}清へ行こう。贅沢な暮らしをさせてやるぞ。・・・それにしても君が俺の計画に賛同してくれるとは正直予想外のことだったな。発掘一筋の君が一体どういう心境の変化なんだい？」

既に恍惚状態のジュディーは掠れた声で答えた。

「いくら勉強していい成績を取つても男の人は可^か愛い子を選ぶわ。たとえ無知で何の取柄が無くともよ。いい例がスージーだわ。あの子は私にとつて邪魔な存在だった。先輩なんて言つて私の後についてくるのは教授の目に留まりたいから。本音はこんな先輩、私の引き立て役くらいにしか思つていないので。だからあなたの言つ通り、発掘するふりをしていたんだわ。」

「君の努力は高く買うよ。俺達は出発点は違つけれど、行き着くところは一緒つてわけだ。・・・ もう、そろそろ仕上がる頃だ。君も出来具合を見に行くかい？」

「いいえ。私はここ^こであなたの帰りを待つているわ。」

「そうか。それじゃ俺は大臣を誘つて見に行つて来るよ。」

テリーがそう言い残し、あの洞穴に向かつたのはケインとジャックがジャスミン達を助け出した3日後、つまり事件発生から6日後のことだった。

裏切られた信頼

1人残つたジユディーは、これからの事を考へることにした。
清しんという未知の国。輝かしい未来・・・それらを思うと一生の仕事
と選んだ考古学さえも色あせて見えた。今までの自分が嘘だつたの
だ。この先泥にまみれ、汗をかいてもシャワーさえ使えない、など
という生活は一度とないのだ。ああ、私は最良の道を選んだ・・・

「ジユディー。」

有頂天になつていたジユディーを奈落の底に突き落とすような厳し
い声がした。ハツとして振り返ると、アーサーとスージーが立つて
いた。

「せ・せんせい！スージー！どうして？」

「今までの話、全部聞かせてもらつたよ。君は何という事をしたの
だ。私は一番信頼していた者達に裏切られた。テリーがあんな男だ
つたとは・・・」

ガクツと膝を折り号泣するアーサー。その姿は威厳を湛えた教授で
はなく、年老いた1人の老人だった。

「先輩！私は先輩を目標にしていましたよーそりや初めの動機は
不純なものだつたかもしれないけど、先輩を見ているうちにそれじ
やいけないと思って勉強も少しづつやってたんですーそれなのにこ
んな・・・一体何故なんです！」

「スージー。あなたのような人にはわからないわ。何の
取柄もない私の気持ちなんか。」

「え？」

「だつてそうでしょう！あなたは何もしなくとも男の人から声をか
けてくるのよ！今までだつてそうだつたわ。私と2人でいると決ま
つてあなただけが注目された。私はいつも引き立て役。そんな私
ことを陰で笑つていたんでしょう！でもテリーは違つた。私の全て

をいいと黙ってくれた。その人に協力してビジがいけないというの！」

今までの憂さを晴らすように言葉を吐き出すジユディー。

「・・・そ・れは・違う・・・ジユディー・・・みんな君を尊敬して・・・いた。・・・ジャックやケインも君の素晴らしい姿を常に・・・口にして・・・いた。・・・ジユディー。今からでも・・・遅くない・・・本来の君に戻る・・・んだ。テリーには・・・私が言つか・・・ら。・・・

さあ、皇女達の居場所を・・・教えるんだ・・・」

「もう遅いのよ！ジャスミン達はテリーの作った協力なアヘンの毒で・・・今頃はもう・・・」

それだけ言つとジユディーは絶望したように駆け出した。一瞬遅れをとつたもののその後を追うスージー。間もなく残されたアーサーの身体が2つに折れるように崩れた。

ああッ！ジユティー！！

スージーの視線と叫び声を背中に感じながらジュディーは必死で逃げた。アーサーの号泣とスージーの想いを目の当たりにして、やつと自分の間違いに気付かされたのだ。後悔で身体が押しつぶされそうだった。

もう走れない！限界だ！と立ち止まつた場所はエローの丘。後ろは断崖・・・下を見ると鬱蒼としたジャングルが広がっている。振り返るとスージーもハアハア息を弾ませながら上ってきた。彼女も限界のようだ。

「何故追つて来るのツ！帰つてよ！」

気持ちと裏腹の言葉が出た

「さっきも言ったでしょう！私はあなたが憎かつた。だからテリーの言う通り手伝つた！あんた達が来なければ私はテリーと大金持ちになつて　　なのに何故邪魔をするのッ！」

自分でも次に出てくる言葉の予想がつかない程興奮しているのかわかる。

「カシミールが教えてくれたの！先輩がテリーさんと一緒にいて様子がおかしいから行つてみろつて！先生も心配して一緒に行くと仰るから、教えられた場所に来てみたら、先輩とテリーさんの話を・・

さすがに濃厚なキスシーンを目撃したとは言えないらしい。

「わかつたわ！ それ以上もういい！ でもやつを言つた事は本当よ
ツ！ 来ないで！ それ以上近付くところから飛び降りるわよッ。」

「来なーどつて言つてるだしうう！」
いだもの、心配する余りその距離を縮めた。

「馬鹿な真似はしないで！先輩！　さっき言つたことは本当だと言つたけれど、私の言つた事も本当なのよ！私はずっと先輩に憧れていた。先輩がジャックを好きだったってことも知つてたわ。けどジャックは発掘のこととなると他の事は全く目に入らない人だった。だから先輩もそうしていたんでしょうね？ならどうしてテリーさんなんかの誘いに乗つたの？！」

自分の気持ちの核心を突かれ、ジユディーの表情が一層険しくなった。

「そ・そんな事、有り得ないわ！　私は単純に考古学を勉強。」

「こんな時まで嘘言わないで！先生も仰つていたでしょう！ジャックは先輩の事尊敬していたつて。お願ひ、戻つて！以前の先輩に！」

「来ないでッ！」　もう・・・遅いのよ。ジャスマン達はテ

リーの作つたアヘンの毒で死んでしまつたわ・・・

「違う！きっとカシミール経ちが助けているわッ！」

「そんなことどうしてわかるのよ！・・・もういいの・・・スージー。

私はあなたが思つているような人間じゃないのよ。それに先生にも心配をかけてしまつた。・・・・・もう元に戻る事はできな
いわ。　さよならスージー。先生にあなたの口から私が間違つて
いたと・・・謝つて許される事じゃないけど・・・謝つておいてね・・・
今までありがとうございました・・・

次の瞬間、ジユディーの身体が宙に浮いた。スージーは素早くその場所に駆け寄つたがすでに遅く、ジユディーの身体はジャングルの中に吸い込まれていつた。

「ジユディー――――ッ！――！」

スージーの叫び声があたりに空しく響いた。

対決（1）

ジュディーの未来がアーサーとスージーによって打ち砕かれたとは知らないテリーは、意氣揚々とジャスミン達のいる洞穴に向かつた。時間を見計らつてヤコブに連絡することになっていたので、召使を使って例の場所に来るよう伝言した。その時のテリーの心中は天にも上る気持ちだった。（これで俺は億万長者だ！）

だが

洞穴の入口まで来てその気持ちは突如として現実に引き戻された。扉が開いているのだ。一体誰が？？？恐る恐る中に入り、薄暗い中を見渡すが・・・目指すジャスミンとプレナムの姿がない。（何だ？何が起こったんだ？）動搖の余りテリーはあちこち動き回つた。その姿を最初から見ていた者がいた。

「テリー様。お探しのものは既にケイン様とジャック様が宮殿に持ち帰りました。」

冷静な男の声。ギョッとして振り返つたテリーの目に、兵士を引き連れたカシミールの姿が映つた。

「全て発覚いたしました。この上は速やかに私達とご同道下さい。」

「ハッ！ 笑わせないでくれよ。カシミール。一体何の事を言つてるんだ？ 私には何の事だかさっぱりわからぬ。」

「テリー様。私の口から言わせるのですか？あなた様と大臣が何をしていたのかを。」

「な・何のことだ。さつぱりわからん。」

テリーの額と脇の下から油汗が吹き出した。

「あくまでもシラを切るおつもりですか。わかりました。証人をここへ。」

カシミールが兵士の1人に言つと、陰のほうから1人の男が引きずり出された。

「お、おまえは！」

「も、申し訳、ありません。私は、私は。」

それは何かと不便もあるつかとヤコブがテリーに付けてくれた従者のテジヤという男だった。見ると体中に傷があった。目は腫れて殆どその役目を果たしていないようだ。かなりの拷問を加えられたのがわかつた。彼は許してくれと言わんばかりに両手を合わせ見えない目を必死に開けていた。

「この男が全てを白状いたしました。テリー様、私達と同じ道を。カシミールの言葉にテリーはサッと身を翻した。その右手には一丁の拳銃が握られていた。その銃口はまっすぐカシミールに向けられている。

「こんな事が起らうとは思いもしなかつたが、まさかの時のために準備しておいたのが幸いした。・・・だけ！」

怯む兵士達を尻目に、カシミールも同じように拳銃を手にしていた。

「いいですか、テリー様。私は命など惜しくありません。父の代から現王に仕え、一朝、事あらばこの身を捨てる覚悟はできております。またそういう風に育てられてきました。ですから撃をするのはあなた様ですぞ！」

気迫の籠つたセリフに一瞬の隙が出来たテリーを兵士達が見逃すはずはない。怒涛のように押し寄せ、瞬く間に拘束してしまった。がっくりうな垂れるテリー。そのままカシミール達はテリーを引き連れ外に出た。ところが・・・・・

絶望に打ちひしがれていると思ったテリーが、身体ごと兵士にぶち当たり、言葉を発する間もなくジャングルの奥へ逃走してしまったのだ。すぐに後を追う兵士達。カシミールはスウォードの不在を悔やんだが、テリーの命が長くないことは想像できた。何故ならこの奥に入つて生還できた者はいまだかつていなかつたからである。

ジャスミン

あの洞穴から戻つたもののジャスミンの意識は戻らない。あの時戻つた意識は何だつたのだろうと思われるほどに。ケインは彼女の部屋に誰も寄せ付けず看病していた。そのお陰で皇女、プレーナム発見のニュースはごく一部の人間しか知らなかつた。このまま家来達を騙し続けるのは良くないことだとわかつていたが、悪人達の陰謀を暴くのには必要不可欠と判断し、表向きはまだ捜索しているふりを続けていた。

プレーナムは宮殿に戻るとすぐ元気になつて、ケインの計画を手伝うと張り切る姿勢を見せたのだが、ケインは苦笑しながら「それじゃ意味がない。窮屈だがちょっととの間辛抱してくれ。」とジャスミンの部屋から一歩も外に出ないよう釘をさした。

救出から3日経つた。（テリーとジュディーにとつては悪魔の日になつた丁度その日・・・）一日に三度毒消しの薬をジャスミンに飲ませなければいけないのだが、初めは吸い飲みで服用させようと試みたのだが全く受け付けないため、ケインはプレーナムの言つ通り口移しで飲ませてみた。すると僅かではあるが飲み込むように見えた。少しづつ飲える事で顔色も良くなつてゐるようだつた。

その日の深夜、（その時すでにテリーの姿はジャングルの奥地へ消え、ジュディーも同じようにジャングルに身を投じていた。）看病の甲斐があつて漸くジャスミンの意識が戻つた。感激の余りプレーナムはジャスミンのベッドに覆いかぶさるように泣き出し、ケインも又改めて神に感謝した。

「プレーナム。」

弱々しいがはつきりした口調だつた。

「ひめ・・・さま・・・」

「ありが・とう。プレーナム。」

「いいえ。・・・みんなケイン様のお陰でいじれこます。ずっと、お休みにもなられずご看病を・・・。」

ブレーナムの言葉に彼女は始めてケインの姿を探した。そしてその姿をはっきりと認識すると、その両目からポロポロと涙がこぼれた。じつと見つめあつた二人。泣くのをやめたブレーナムはそつと隣の部屋へ引き下がつた。

ベッドに近寄り数日の間に一段と細くなつたジャスミンの手を取り、額にそつと口づけするケイン。

「生きていて良かった。」

呟く声も掠れていて殆ど聞き取れない様子だつた。そのままジャスマンの柔らかく長い髪に顔を埋めじつと涙を堪^{じら}える姿に彼女もまた呼応するようケインの背中に回した手に力を込めた。

「ケイン様。宜しゅついでございますか?」

感動が落ち着く頃合を見計らつたかのように隣部屋からカシミールの声がした。

隣の部屋でプレーナムに聞いたのか、カシミールはジャスミンの意識が戻った事を伝えて、

「宜しくうございました。」

とたつたひと言言つただけで、ケインを早く部屋の外に連れ出した。 そうな素振りを見せた。 あ、うん、の呼吸でプレーナムがお薬を飲みましょうね、と入つてくる。 仕方なくカシミールの後に付いて行くと廊下の隅でジャックが2人を待つていた。 3人はそのまま滑るように次の間に入り鍵をかけた。 ケインがジャスミンの回復を告げるとジャックは目に涙を浮かべ、良かつた！良かつた！を連発した。

「全てケイン様のお陰でござります。 プレーナムも手を差し伸べる事すら出来なかつたと申しておりました。」

少し経つて感動が押し寄せてきたのか、カシミールの言葉も涙で震えていた。 その顔はケインに殴られた痕あとが黒々と残つたままだ。 事件が起きたせいですっかり忘れていたが、ケインはカシミールの顔を見たくない程怒つっていた。 だが今更彼を責めても仕方ないし、今回一件では神経が擦り減る程の苦労をした。 それを思うと不思議なほど素直な気持ちで彼を受け入れることができた。

「カシミール、顔は大丈夫か？あの時は僕が悪かつた。 お前の立場も考えずつい手が出てしまつた。 すまない。」

「いいえ。 ケイン様のお怒りはござります。 私が浅はかでございました。 申し訳ございませんでした。」

そこでカシミールは一呼吸おいた。

「さて、お一人に重大な事をお知らせせねばなりません。 ・・・ 実は、配下の者の調査により、今回、皇女誘拐の犯人がわかりました。」

「何だつて？！」

「はい。 それはヤコブ様、そしてお一人と行動を共になされていました。」

テリー様・・・

「え！テリーさんが？！」

ジャックが驚きの声を上げた。ケインは以前テリーの様子がおかしいと聞いていたため、左程驚きはしなかった。

「ま、まさか・・・」

ジャックの受けた衝撃はケインの目にもいかに大きいかがわかつた。「ジャック様。2人だけではありません。何と、ジュディー様が途中からテリー様と行動を共にするようになったのです。」

「ええ！？」

ジャックはへナへナと座り込んでしまった。ケインも一の句が告げないほどのショックを受けたのだが、辛うじてとどまることができた。

「カシミール。それは本当なのか？！」

「はい。間違いございません。事実、あの洞穴に皇女達の死を確認しようと舞い戻ったテリー様を追い詰め捕縛したのですが、一瞬の隙を突かれジャングルの奥に逃げられてしまいました。ですがあの中へ入つて生きて帰つた者はありませんのでおそらくテリー様はもう・・・」

テリーを取り逃がした事でカシミールはずつと自責の念に駆られていた。表情がそれを物語っている。元々ケインにカシミールを攻める気持ちはなかつたのだが、何と黙つて慰めたらいいのかわからなかつた。

「ジュディー様の事は教授とスージー様に様子がおかしいので見て来て貰いたい、と伝えましたので、お一方が何とかしてくださるでしょう。」

しかし彼等の誰一人、ジュディーが断崖から投身したことは知らなかつた。

「そこで私達はこれからどうすべきか、ケイン様にござ指示を仰ぎたいのでござります。」

ケインを見上げるカシミールの目は真剣そのものだ。

「指示？お前の主人は王だらう。僕はその役に相応しくない。」

「王より、自分にもしものことあらば、お前の判断で良いから主とするお方を選び、その方の指示を仰げ。と常々言われておりました。」

「それが僕だといつのか？」

「御意。」

「そうか。それじゃ遠慮はしない。ちょっと耳を貸せ。」

ケインの顔にくつつくようにカシミールは自分の耳を寄せた。ケインの方が背が高いのでカシミールは背伸びをしなければならない。ケインも又、膝を折つて何やらコソコソ・・・時折カシミールは頷きながら聞いていたが、突然パアッと表情が明るくなつた。そして、

「ケイン様！あなた様はやはり素晴らしいお方です！」

感激の言葉を叫ぶように言つと、カシミールは素早く部屋を出て行つた。

（約束の時間まであと少し。そうすればこの谷は私のものになる。）逸る心を抑えきれず、口元が自然に綻んでくる。ヤコブはテリーが行方不明になつたことも知らず、ソワソワと落ち着かない様子で宮殿の中を動き回っていた。（テリーは一度様子を見に行くと言つていた。その状況で知らせが早くなるかも知れない。そうだ！）はじめと待つているべきなのだ。王たるもの、如何なる場合であつても臣下の者達に心の内を悟られてはならぬ。）

「ン？ そち達はどこへ行くのだ？ おお、洗い場か。精が出るのよ！ 仕事に精を出せば良いこと必ずあるものだ。よしよし、行きなさい。」

下働き達にまで声を掛けるなど、今までなかつたことまでてしまふ。それほどまでにこの3日間ヤコブの機嫌は良かつた。（もし私が王になつたら……今以上にテリーを利用し、谷の花を売り、金儲けが出来る。富と権力を手に入れたものに文句を言える者などありはしない！）ヤコブの一念が通す……そんな勢いである。

だが……約束の3日目の夜になつても一向に連絡の者が来ない。おかしい。変だ。どうしても気持ちが落ち着かず自分の部屋を出ようとしたその時、待ちに待つた連絡係の男がやつてきた。ヤコブ腹心の部下、デボンである。

「オオ！ 待つておつたぞ。して首尾は……」

「はい。テリー様の知らせにて大臣をお連れするよ！」

「やうか！ ならばすぐ参りう……」

ヤコブは先に立つて部屋を出た。行く先はあの洞穴だった。

ケインは意氣消沈しているジャックにテリーがヤコブと共に何をしようとしていたのか探ろうと勇気付け、真っ暗な外へ出た。カシミールに自分の考えを伝えたものの、上手くいくかどうか不安もあつたが、やつてみないことにはわからない。人知れず洞穴に向かわなければならぬのだ。しかし灯りなしでは一步も前へ進めない程だ。するとグルグル・・・ケインの耳に聞き覚えのある音が聞こえてきた。

「スウォードお前か！お前がいればこんな闇も真昼のように進む事が出来る。スウォード、ジャスミンが捕らえられた洞穴ほらあなに行きたいんだ。僕とジャックを急いで連れて行つてくれ！」

ジャスミンを捜しにあの洞穴に行つた時から何故か自分の言葉がスウォードには通じるのではないか？と思うようになつていて。人間の言葉を理解する野性のベンガルトラの存在など以前は考えられなかつたのだが、今は確信して言える。少なくともスウォードだけは僕の言葉が解る・・・と。まるで乗つて下さいとばかりにスウォードはケインに背を向けた。ジャックの前にも足音もさせず別のトラが近寄り、同じように背を向けた。

「ジャック、スウォード達に任せよう。」

言つが早いが、ケインはサツとその背に飛び乗つた。脱兎の如く駆け出すスウォード。ジャックも負けじと目の前のトラに飛び乗つた。

3日前。自分達の足で来た時は遠く感じたこの距離も、4本足の疾走ではあつという間だつた。洞穴の入口で降りるとまたスツとスウォード達は視界から消えた。

カシミールが来ているはずなのだが一体どこにいるのだろう。だがむやみに扉を開けることは出来ない。奴らがいるかも知れないからだ。そんなケインの思惑を察したのか、暗闇の中からケインを

呼ぶ声がした。カシミールだった。

「カシミールか？大丈夫なのか？」

「はい。まだ来ておりません。どうぞこちらへ。」

その声のする方へ向かっていくと、丁度洞穴の横にあたるとこに小さな入口があつた。それは大人が横になつてやつと通れるくらいの細長いものだつた。

中に入ると薄明かりの中、プレーナムともう一人の侍女がジャスミン達が縛られていた石柱に同じように縛られていた。

「これは一体どういうことだ！」

「ケイン様の指示通りにいたしました。」

「僕は人形を。と言つた筈だ！大切な侍女にこんな危険な事をさせるわけにはいかない！すぐ彼女達を放すんだ！」

「いいえ！ケイン様。私達が是非に！とカシミールに頼んだのです！私もこのミンミンも姫のためなら命なんか惜しくありません！」捲し立てる様にプレーナムが言えば、ミンミンと呼ばれた侍女も同調するように力強く頷いた。

「私は5歳の頃から宮殿に上がつております。姫様のお役に立てるなら命も厭いません！」

彼女もプレーナムに匹敵するほどの強い意志の持ち主のようだ。

「だからと言つてこんな危険な事をして本当に死んだらジャスミンはこれからどうすればいいんだ！彼女にとつてはお前達だけが友達だろ！ダメだ！ダメだ！僕にはそんなことに同意できない！すぐここから出て行くんだ！」

「いいえ！もしこのまま何もせずにここから出て行かなくてはならぬなら……」

プレーナムは一瞬の隙を突き、カシミールの腰から剣を奪い取つた。

「これでミンミン共々ここで死にます！」

必死の形相にケイン達はどうすることもできなかつた。

「……お前達は……ありがとう。そこまで……わかつた。お前達の思うとおりにしよう。でも！危ないと思つたらすぐ

助けを呼ぶんだ。いいね！」

ケインは仕方なく彼女達をそのままにして各自（おのおの）隠れられ
るような場所に身を潜めた。^{ひそ}あとは手箸通り、虫が飛んでくるのを
待つばかりとなつた。

飛んで火にいる夏の虫

ホクホク顔のヤコブはデボンの案内のあと、ケイン達が待つ洞穴に向かつた。こんな暗闇の中でさえも全く気にならない様子で足取りも軽く歩いていく。ワナが仕掛けられているなどとは考えてもいないうだ。普段のヤコブなら一応石橋を叩いて渡るのに、今回に限つては注意さえ払っていない。

ようやくたどり着いて扉の前に立つと、ヤコブは一つ大きな深呼吸をした。（落ち着くのだ。）と小さく咳き、ゆっくり扉を押し小声で、

「テリー。私だ。ヤコブだ。例のものはできておるか？」
と言ひながら入つて行つた。

松明の灯りの端の方にジャスミンとブレーナムと思われる2人が縛られたままぐつたりしとしていた。すぐ駆け寄つたものの状態を想像するだけで恐ろしく、触れることが出来ない。一定の距離を保ち、2人の周りを窺いながら回つてみる。ふと、テリーがいないことに気付いた。

「テリー、どこだ。勿体をつけずとも良い。」

すると突然吹くはずのない風が吹き、松明が一瞬にして消えた。ギョッとなるヤコブの頭上から低い声が響いてきた。

「ヤコブ・・・我は破壊の神、シヴァなるぞ。神聖なる場所で何をするつもりだ。」

シヴァ神になりましたケインである。

「だ・誰だ！」

暗闇の中でもキヨロキヨロしているヤコブが手に取るよに見える。

「お前は神である我が土地を汚して良いと思っておるのか。」

「な・何を言うーお・お前はだ・だ・誰だ！」

ケインはヤコブの声を完全に無視した。

「お前とその物陰に潜んでいるリュー・テリーは、谷の花を使って一体何を企んでおるのだ。」

テリーがいる！そのひと言はヤコブに百万の力を与えた。

「フン！誰かは知らぬが神の名を騙る輩に何も言ひ事はない！」

「神をも恐れぬ不届き者め！ 良からう。お前が真実を言わぬというのならこの私が全てを明らかにしてやる。だがその時は覚悟を決める時だぞ！」

テリーがいれば何も恐れる事はない。その絶対的な自信から相手がたとえ神であつても全く動じない。むしろやれるものならやつてみろ！と言わんばかりにヤコブは仁王立ちになつた。しかしケインにはヤコブ以上の自信があつた。

「お前は以前から次期王を狙つていた。初めはジャスミンを我が物にして帝位を。しかしそれが叶わぬと知るや、次の手段を探した。その時幸運にもテリーが現れた。テリーはお前がそういう気持ちでいることをすかさず見抜き、それとなく話を持ちかけた。お前には帝位を、テリーは財力を。そして誰の目にも分るほど大量の花を根こそぎ掘り起こし、全てイギリスへ持つていつてしまつた。

「そうだろう？テリー。」

ケインはいらない筈のテリーがあたかもすぐそこに隠れているかのように話しかけた。

しかし当然のことながら返事はない。だが今はそれで充分だつた。更に続ける。

「そしてある程度目的に近付いたお前達は、次の標的をジャスミンに変更した。彼女を生きものにして次期帝位を狙つたのだ。使うものはテリーの調合した協力なアヘン。勿論この谷から採つた花の茎と根を使って作つたものだ。ジャスミンとブレーナムがそこに死んでるわ。今から3日前のお前達の仕業でな。」

（ジャスミンが死んだ？やつたぞ！これで私が王だ！）暗闇の中でヤコブは小躍りして喜んだ。

ところが急にヤコブが黙ってしまった。じつと天井を凝視し始めたのだ。やがてはつきりした口調で言つた。

「お前はケインだな。」

ケインはカシミールに合図し灯りを点けさせた。パッと辺りの視界が開けヤコブは目を瞬かせた。すると目の前にケインが立っていた。「やはりお前か！この茶番は何なのだ！無礼な。密だと思えばこそいろいろ面倒を見てやつたのに。これは背信行為じゃ。だがこのようなことをするからには覚悟はしているのだろうな。」

そのセリフと共にヤコブは懐から拳銃を取り出しケインに銃口を向けた。

「ああ。」

「それにしてもこのような所に1人で来るとは見上げたものよ。愛しいジャスミンがいなくなつて気が触れたのではないのか？」

「そうかもしね。ジャスミンがいなくなつてからの僕は普通じやなかつた。」

「フン！それももう終わりにしてやるつ。ジャスミンの後を追つてお前も死ぬのだからのお。」

「そうか。・・・・わかった。僕はもうこの世に未練はない。喜んでジャスミンの後を追うよ。でもその前に大臣の口から本当の事を聞かせて欲しいんだ。冥土の土産に。」

「ははは！良からう。大方は先程お前が申した通りだ。私は富と地位を得、テリーは花を全部清国へ売り、百万の富を得ると言つておつた。のお？テリー。それに間違はないの？」

「いる筈のないテリーに向かつてヤコブは問いかけた。勿論それに対しての返事はない。

「テリー！何故返事をしない！」

苛立つたヤコブの声が空しく響く。

「大臣。僕が何故ここにいるのか疑問に思わないのか？」

初めてケインはヤコブに不安を抱かせた。

「もういいだろ？』

それが合図となつてジャックがヤコブの腹心の部下、『ボンを捕らえて石柱の陰から現れた。続いてカシミールと兵士達も意外な人物を伴つて現れた。

瀕死の状態にあつた筈のムファード王を椅子に乗せ、啞然とするヤコブを尻目に中央に出て來たのである。

「ア・ア・・・義兄上・・・ま・まさか・・・」

「ヤコブ。今の話しさは眞の事なのか。』

口調も以前のままと同じだ。

「な・何を仰る！全部この者、ケインの作り話でござります！どうかご信じならぬようお願ひ申し上げます！テリー！お前も義兄上に申し開きをするのだ！」

「大臣。テリー、テリーと先程から仰つておられます、彼が一度でも大臣の問い合わせに返答いたしましたか？彼は企てが発覚したとみるや、ジャングルの奥地へ逃げ込み行方知れずになつてしましましたよ。』

あくまでもケインは冷静だ。それに引き換えムファード王の元気な姿を見せ付けられ、尚、テリーが行方不明になつたと知らされたヤコブは、一遍に奈落の底に引きずり下ろされてしまった。

「あ・義兄上！ い・いつ本快なされたのです？」

それだけ言うのがやつとだ。

「本快？私は初めから倒れてなどおらぬ。全てそなたの悪事を暴くため、そこにあるケインと相談してやつたことじや。』

ケインを見つめる王の目は優しさに満ちていた。

「んぐぐぐぐ！・・・何と言う事だ！しかし、証人も証拠もないのにどうのこうにして立証なさうとしておられるのです。』

この後に及んでも尚、強気のヤコブ。とその時。

「証人ならここにおりますわ！」

さつきまで死んでいたとばかり思われていたブレーナムが立ち上がった。

「ブ・ブ・ブレーナム！おまえ！ するとどうぞ！」

「侍女のミンミンです！」

愕然とするヤコブ。一旦崩れかけた身体を何とか立て直し、ミンミンをぐいっと引き寄せると突然持っていた拳銃を彼女のこめかみに当てた。彼の指が少しでも動けば一瞬にしてミンミンの命は奪われてしまう！！

だが次の瞬間。ヤコブの瞳に信じられないものがはっきりと映し出された。

対決（2）

「オ・オピウム・・・」

一瞬の虚をぬきケインの蹴りがヤコブの持つていた拳銃を吹き飛ばした。間一髪危機を逃れたミンミンは素早くプレーナムの側に駆け寄つた。

油断し、拳銃を取られ人質を逃がしたヤコブは、短剣でケインに襲い掛かつた。それをみたデボンも息を吹き返したようにジャックの腕を払い応戦に出た。

ケインは父ジエイムズが旅の途中で学んだ拳法を幼少の頃から習つていたので、武器を持つていなくても難なくその反撃をかわす事が出来たのだが、ジャックは普通の幼少時代を過ごしてきたため捨てるデボンに押さえ込まれてしまつた。それを見たカシミールはジャックの加勢に加わり、今度はケインとヤコブ、カシミールとデボンという主従それぞれ一騎打ちとなつた。ほぼ中央でケインはヤコブの攻撃を左右によけながらかわしていたが、やけになつているヤコブの剣は、隙のないケインにとつても十分脅威に値した。

「ハツ！」「ハツ！」

1つ1つの技に気合が入る。

「ハアハア・・・

目藏めつぱう突きを出していたヤコブの息が荒くなつてきた。頃合を見計らつてとどめの蹴りをヤコブの大腿部に喰らわせた。

「ウツ！」

とつとつヤコブも力尽き、王の兵士に捕らえられた。

カシミールとデボンは小さい頃からの因縁があつたらしく、怒鳴りあいながら殴り合つていた。

「お前があの時、王妃様から頂いたお菓子を多く取つたんだ！」
とか、

「お前がハヌマーン」こっこをしていた時ズルしたんだ！」

などと辻褄の合わない事を口走っていた。

ケインは彼等をそのままにしてヤコブと同じ田の高さになるよう膝をついた。

「大臣。いえ、伯父上。たとえずっと会つた事がなくとも今、僕はそう思っています。さつき母の名を口にしましたね。あれは僕の額を見たからではありませんか？僕の母、オピウムも同じ形のアザがあつた。そうですね？これを見て母を思い出したのでしょうか。僕の場合、何かで気持ちが高ぶった時にしか現れない今まで気付かれなかつたんだと思います。それで隙が出たのでしょうか？」

「ヤコブ。そちを騙すような真似をしたのは全て私の命令だ。恨むなら私を恨め。だがそなたのしたことはこの谷始まって以来の大罪ぞ。その事はわかつておろうな。処罰は詮議の上決定する。

連れて行け！」

王の言葉は威厳に満ちていた。屈強な2人の兵士がヤコブの両脇をしっかりと押さえ、前後左右を数人の兵士が取り囲むように並ぶと、そろそろ白み始めた外へ出て行った。

彼等が出て行くと残ったのはケイン、王、ジャック、カシミール、フレーナム、ミンミンの6名になった。静寂が彼等の周りを覆うと、ムファード王はゆっくりとケインに視線を移した。皆が呆然とするなか、ジャックだけは何故かソワソワしている。

「…………ブマーマグプタ…………いや。今はケインだつたの。よくやつてくれた。礼を言つぞ。これで私は引退できる。私の後継者はそなただ。」

王の口からはつきりと次期王はケインだと告げられると、全員が歓喜の声を上げた。しかし当のケインの表情は冴えない。

「いかがいたした？ 私の後では不服か？」

「陛下。…………1つお尋ねしたいことがあります。」「何だね？ 改まって。」

「陛下は大臣の処遇をどうなさるおつもりですか？」

思いもよらぬ質問に王の顔が強張った。

「今はそれを論すべき時ではない。」

「ならば僕はあなたの申し出を受ける事は出来ません。」「どういう意味だね？」

意外な展開に王は混乱している。それがはつきりと肌で感じられるようになに空気がピリピリしてきた。

「陛下のお考え一つで僕は準備が出来次第イギリスへ帰る。ということです。」

「私を脅しているのか。」

「いいえ。元々僕はこの谷の人達にとつてよそ者にすぎません。その僕がたとえ血の繋がりがあるからといえ突然王になつたとしたら？ 谷の人達はどう感じるでしょ。また何故ジャスミンが王ではないのでしょうか。そして大臣を推していた一派からあなたは猛反

撃を受けるかもしません。そつた時苦しむのはジャスミンです。きっと彼女は僕を守ろうとするに違いありません。でもそうすれば彼女が追い込まれていくのは明らかです。そんな彼女を見る事は出来ない。そうならないためにも今、この時の処理を伺いたいのです。」

落ち着き状況を見据えたケインのひと言ひと言が全員の胸に響いた。「ケイン！私の後継者はやはりお前の他はない！カシミール。私とお前の目に狂いはなかつたぞ！」

固い表情から一変して王の顔つきが歓喜のそれになつた。

「陛下！私も陛下と同じ気持ちでござります！ケイン様！あなた様を於いて他に次の王に相応しいお方はございません！」

カシミールの目には感激の涙が浮かんでいた。

「ケイン。改めて問う。そなたならこの一件どう処する？」

「助言を求めておられるのですか？」

「左様。」

「あくまでも助言という形でなら……僕は大臣を処罰という形ではなく別の方法で処理したらいのではないかと。たとえば、そうですね……制裁で充分だと思うのです。まずテリーさんと組んで得た財力は全て没収し、更にこの谷から奪われた花を全部元通りにしてもらう。そのための労働をさせるということです。ここはボンベイからも離れていますし、一度と悪いことが出来ないよう、村人達一人一人に監視してもらうのです。勿論、元大臣という肩書きがあるので村の人達は最初は遠慮するでしょう。遠慮しているうちはまだ良いのです。それが無くなつた時大臣がどう出るかによつて彼自身の信用を得られるかどうか。その時間が彼を罰してくれるのではないか……」

そこでケインはため息をついた。

「これはあくまでも僕個人の考えです。ですから陛下のなさりたいようにして頂ければ結構です。」

「でもケイン様。もし陛下がヤコブ様の処罰を断行する、と決断さ

れればあなた様は帰国なさつてしまわれるのでしょうか?」「

プレーナムが心配そうに聞いた。

「いや。そういうことではないよ。僕が言いたいのは、悪い事をした人でも改心する機会を与えてやるべきだということであつて、そういう意思のある者を簡単に罰するべきではないところ」となんだ。」

「でも結局はそうなさるんでしょう? もしそうなつたら姫様はどうするんですか? 残された姫様は?」

気丈なプレーナムもジャスミンの事になると涙腺が緩むよつだ。

「彼女ならきっとわかつてくれると思う。そのために僕達の絆が途切れようと現実を見つめてくれるよ。」

「えつ? !」

全員がまた驚きの声を上げた。真っ直ぐ王を見つめるケイン。じつと見つめ合つ2人。静寂が辺りを一層覆う。

最初に視線を外したのは王の方だった。

「ケイン。

先程の私の言葉を忘れたらしいの。私はお前しかしない、と言つた筈だ。お前の決でヤコブを処そう。今まで私は悪事を働いた者は全て厳罰に処してきた。これからは最早そのやり方は適用しない方が良いのかも知れぬ。 カシミール。早速ヤコブにそう伝えよ。」

「陛下! !

「駄目だ! もう決めたことだ! ここからは私のやり方でやる。カシミール、行くのだ!」

「はい!」

嬉しそうに走り出て行くカシミールを見送ると、同じように嬉しさで体中はちきれそうなプレーナムとミンミンが王の側に寄り添つた。

「ケイン! 」つちに来てくれ!」

先程からおとなしかつたジャックが突然叫んだ。

重なる不幸

ジュディーの最後を見てしまったスージーはその場で泣き崩れ、涙が枯れてしまうのではないかと思うほど泣いた。そのうち何に対し悲しいのかわからなくなってしまった。フラフラと立ち上がり、鼻歌交じりにヨロヨロ歩き出した。

どれ位の時間が過ぎたのかも分らない。漆黒の闇の中、時々踊つたり止まつたした。時折大きな声で歌つた。他人の目で見たら、スージー本人がが狂つているのか、とさえ映るような足取りだつた。

ボスツ！突如、何かが彼女の足に当たつた。

「イッタイなあ。・・・・アレエ？ センせい。何でこんな所に寝てるの？」

スージーがぶつかつたのはアーサーだつた。ところがかなり勢い良くぶつかつたのに返事がない。そして微動だにしない。

「先生。先生つてばあ！」

スージーはその身体をグリグリ揺すつた。だが・・・・ようやくおかしい、変だ。と正気に戻つた彼女はアーサーの顔に手を当てた。しかし既にその顔は冷たくなつていた。まさか、と彼女は腕の脈を取つてみた。・・・・ない・・・・今度は胸に耳を押し当てた。・・・しかし彼の鼓動は聞き取れないばかりか全く感じることが出来なかつた・・・・しかもアーサーの身体は二つ折りになつたまま既に硬直していた。

「先生！－うあああああ－！」

もう涙なんか出ないだろうという程泣いたのに、また新たな涙が両目から流れ出した。度重なるショックに彼女はアーサーの身体に折り重なるようにして氣を失つた。

「え？」

ジャックに呼ばれ中途半端な気持ちのままケインは彼に近寄った。
「見ろよ、これ。」

その指差す方向を見ると、今まで何故こんな大きいものに気付かなかつたのか？と思えるよう石の建造物があつた。

「これは？」

「テンブル！ お寺だよ！ たぶん教授が言つていた新しい石窟寺院だ！ もしかしたらこれだけじゃなくてこの奥にあるかも知れない。わからない？ んー！ 何て説明したらいいんだ？ つまりだ、もつとたくさんの寺院があるかも知れないってことなんだ！ ケイン、これが本当なら俺達はとつとうやつたつてことなんだ！ 大発見をしたってことさ！」

狂喜乱舞するジャック。

「本当か！ ジャック。君の、いや君達の説は正しかつたってことがこれで証明されたんだろ？ すごいじゃないか！ やつたな！」

ケインも友人の大発見に一緒になつて喜んだ。

「い・いや。まだはつきりそうだとわかつたわけじゃないんだ。そうだと仮定すればすごい事なんだ！」

謙遜するジャックだったが、その言葉には自信に溢れている。しかしムファード王、ブレーナム、ミンミンの3人だけがこんなもので何をこんなに喜んでいるのか、と訝しげな表情で2人を見ていた。それに気付いたケインは事のあらましを今までのジャック達の苦労話などを交えながら説明した。

「あ！ 教授にこの事を知らせなければいけない！ そうだ！ ボヤボヤしてなんかいられない！ ケイン、皆さん！ 申し訳ないが私は一足先に失礼します！」

言うが早いがジャックは外に飛び出した。開いた扉から朝日が差し

込み、4人の足元を照らした。

ジャックに遅れること一時間。カシミールが手配した兵士達と共に王、ブレーナム、ミンミンと宮殿に戻ったケインは、何やら重苦しい雰囲気を感じた。すすり泣いている侍女もいる。通りがかつた者に事情を尋ねると、アーサーとスージーが変だ、というだけでさっぱり要領を得ない。ジャックが戻ったはず、と言うとスージーの部屋にいるということだけはわかつた。胸騒ぎを覚え、すぐスージーの部屋に駆けつけると、部屋の隅で小さくうずくまつてこるジャックの姿があった。

「ジャック？」

呼んでみたが反応がない。肩に手を掛け更に彼の名を呼んだ。するとジャックの身体がピクッと動き、ようやく顔を上げた。

「一体どうしたんだ。教授とスージーに何があったんだ？」

「ああ、ケインか。教授が亡くなつたんだ。」

他人事のように答えるジャック。

「え？」

教授が亡くなつた？ いつ？ どうして？

「ケイン、俺、おかしいだろ？ こんなすごい事をこんなに簡単に言えるんだぜ。悲しいはずなのに涙も出ないんだ。なあ！ 俺変だろ？」

！」

ジャックはケインの胸元を掴みグラグラ揺すった。

「ジャック・・・・・・」

「ウワー！」

そこで初めてジャックが泣き崩れた。

その声でベッドに寝かされていたスージーが目を覚ました。

「！」

「スージー。僕だ、ケインだ。わかるか？」

「あ、ケイン。どうしたの？ 私、どうしてこんな所にいるのかしら

？」

「起きなくてもいいよ。・・・・ねえ。それより聞きたい事がある
んだけど、いいかな？」

「聞きたい事？ええ、いいわよ。何かしら？」
「教授の事なんだけど。」

「先生の事？何？」

「何つて。君、ずっと一緒にたんじやないのかい？」

「ええ、そうよ。先輩も一緒にたたわ。それがどうかした？」

「教授が亡くなつたと聞いたんだけど、詳しい話、聞かせてくれな
いかな。」

「え？先生が？嘘よ。ケインたら嫌ね。私をからかうのもいい加減
にしてくれない？」

そう言つてベッドから立ち上がるスージーには特段変わつたところ
はない。足取りも軽く部屋から出てアーサーの部屋に向かつた。ケ
インもその後を追つたが、ジャックは相変わらず呆然としたままで
やがみこんでいた。

アーサーの死

アーサーの部屋では谷に来てからずっと彼の世話をしていた侍女達が、オイオイ泣きながら死後の世界へ旅立つ亡骸なきがらを花と綺麗な衣装で飾っていた。しかしそれらを見てもスージーの表情には何の変化もない。ケインにははつきりとアーサーの死が感じられたとうのに。

「まあ！ あなた方は一体何をしているの？ 先生・・・アラ？ 先生、こんなにベッドを綺麗にしてもらつて。・・・いやだわ、みんな。どうしたの？ 先生寝てるだけじゃない。まるで死んだ人みたいなことしないでよ。」

「スージー、君・・・もしかしたら記憶がないのか？」

先程からの彼女の言動は記憶の消失としか説明の仕様がないと思えた。

「記憶？ 何を言うのケイン。私はあなたの事もジャックの事もこの谷へ来た事も覚えているのよ。それを記憶がないなんて、失礼にもほどがあるわ。」

「じゃあ聞くけど。さつき君はずつと教授と一緒に言ったね。その教授が亡くなつたのに何故その理由を、いや、死の事実を知らないんだ？」

「だからあ！ 先生は死んでなんかいないのよ！ ホラ！」

スージーはアーサーの顔に触れた。ヒヤッとした触感に驚き手を引いたものの。今度は両手でその身体を確認してみる。冷感と同時に異様な身体の強張りによくおかいと気付いた。

「ねえケイン。一体どうしたの？ 先生冷たいし何だか硬いわ。」

「スージー。たぶん君は教授の死にショックを受け一時的に記憶を無くしたんだよ。・・・いいかい、よく聞くんだ。教授は亡くなつたんだ。死んだんだよ。おそらくその理由を知っているのは君

とジュディーしかいないと思つ。 ジュディーは何處にいるんだ
い？」

「ジュディー？・・・ジュ・・・ヒイイイイ！－！」

スージーは突然何を思い出したのか、天を貫くような悲鳴を上げ、
ものすごい勢いで暴れだした。咄嗟のことで一瞬たじろいだケイン
もすぐ体制を建て直し、その身体を押さえ込もうとした。だが、狂
人のような力で暴れ回るスージーに手も足も出ないような有様だ。

「スージー！いい加減にしろ！－！」

大喝するケイン。その声にハツと我に返り、ようやく記憶が戻つた
のか次にケインの胸に飛び込み大きな声で泣き始めた。理由はまだ
わからなかつたが、ケインはスージーをそのまま受け止めることで
彼女の気持ちが落ち着くのを待つた。

ケインの胸で精一杯泣いて少し落ち着いたのか、スージーはポツリポツリ話しだした。ケインは近くにあつた椅子にスージーを導くと一緒に腰を掛け、勇気付けるように背中をポンポンと優しく叩きながら話を促した。まるで泣き止まない赤ん坊をあやすように。

「……カシミールに言われ、先生と私は先輩のいる場所へ行つたわ。するとテリーさんと先輩が2人の将来について話していたの。これから清の國へ行き、ここに花をどんどん売つて今以上に金儲けをするという内容だつたわ。しばらくするとテリーさんがどうなつたか見に行くと言つてどこかへ行つてしまつた。驚いた私達は慌てて先輩の前に姿を見せたわ。先輩も驚いた様子だつたけれど、先生の今ならまだ引き返せるという言葉にいたたまれなくなつたのか突然逃げたの。私はすぐ後を追つた……ようやく追いついたのがエローラの丘。そこでテリーさんの向かつた所がジャスマイン達を殺そうとしている場所だと聞かされたの。私、止めようとしたのよ！それなのに先輩はもう遅いと言つて……断崖からあのジャングルに・・そのあと私、わけがわからなくなつて・・・きっと歩いていたんだと思うの。そしたら何がが足に当たつて・・・見てみると先生だつた。寝てるのかと思って触つたら冷たくつて・・・」一気にそこまで喋るとまたその光景を思い出したのか、ケインの胸に顔を埋め、声を上げて泣き出した。安心させるためにケインはその身体をギュッと抱き締めた。

「わかつた。もういい。あとは僕達が何とかするから君は安心して休むんだ。いいね。・・・彼女を部屋へ連れて行つてくれ。」

側にいた侍女にスージーを頼むと、ケインはその足で王の部屋へ向かつた。

ケインの口から事情を聞いたムファード王は、すぐカシミールを呼び寄せた。傍には漸く歩けるようになつたジャスミンが控えている。

「お呼びでござりますか。」

「うむ。今、ケインから教授とジユディーの件を聞いた。ヤコブとテリーの悪巧みのせいで他の2人の命が消えてしまった。やはりヤコブの処罰を再考した方が良いかもしだれぬ。良いか?」

次期王と自ら認め内々で発表したためか、王はケインに同意を求めた。元より状況が変わつて新たに犠牲者が増えたとあつてはさすがのケインも王の決定に異存があるはずはなかつた。同意を表すように頷く。

「断罪にすべきところなれど、これ以上この件で血が流されるのは耐えられぬ。よつてヤコブをこの地から永久追放とする。無論財産を全て没収の上でじや。・・・・良いか?ケイン。」

「陛下のご随意に。」

「決定! カシミール。すぐこの決定をヤコブに伝えよーその上で即刻あ奴を追放するのじや!」

「御意!」

「これで良かつたのかの。」

カシミールが出て行くと王は呟いた。それに呼応するかのようになインも独り言のように呟いた。

「僕も密かに国外追放を、と考えていました。陛下がああ仰つたので内心ホッとしたところです。確かにこれ以上人が死ぬ事は避けるべきです。教授の亡骸は手厚く葬つてあげましょ。」

その2人の姿を後ろから見ていたジャスミンは、離れて幾年時を過

「それでも尚、彼等の間に深い血の繋がりがあるのを感じ取っていた。

地下牢に軟禁されていたヤコブは、王の決定をカシミールから聞かされると驚きの表情を見せた。断罪は免れぬ。と覚悟していたのに国外追放だとは・・・王の心にどんな心境の変化があつたのだろうか？その問いにカシミールはケインの影響もたらしだろう。と答えた。当初、王の下した決定は、テリーによつて齎された金品は没収の上、谷の花の復興に努めるなら罪には問わず。というものだつた。それはケインの提案であり、それを王が推奨したものであつた。それを聞くとヤコブはしばらく黙つて牢の土壁をじつと見つめていたが、突然ケインと話がしたい、と言い出した。それは許されぬ、即刻追放しろ、と王から命じられている。とカシミールが冷たく言い放つと、何としても話さねばならない！と頑として譲らず、そのまま瞑想にふけつてしまつた。

仕方なくそのことを王の部屋にいたケインに伝えると、危ないから止めて、といつジャスミンの言葉も聞かずケインは地下牢に足を運んだ。

ヤコブはケインが姿を見せるなり2人きりにしてくれと言つた。ケインが田で合図すると兵士達も自分達の持ち場を離れた。

2人になるとヤコブは目を開き、じつとケインの顔を見つめた。しばらくするとその両目から涙がこぼれ落ちた。どうしたのだろうか、とその訳を尋ねようと一步前に踏み出すと、途端にヤコブは声を押し殺すように泣き出してしまつた。両手、両足を鎖で繋がれている為、顔を覆うこともできず、ただ大粒の涙が頬を伝つて流れ続ける。仕方なくケインはヤコブの気持ちが落ち着くまでじつと待つことにした。

どの位時間が経つたのか地下牢の中では分らなかつたが、兵士達が様子を窺いに交替で何度か姿を現したのを見ると、かなりの時

間が経つたのだろうと推測された。それを察したのかどうか、ようやくヤコブは顔を上げ、ゆっくりと話しだした。

「……ケイン。私はお前が生まれるよりも前に姉と共にこの地にやつて來た。姉はムファード皇子、今の王の妃として、私は護衛も兼ね、臣下の一員として。あの頃は婚礼の日になるまでお互いの顔さえも知らなかつた。私は何度か前王や皇子に事前に会つていたが、家族達と会つたのは婚礼の当日が初めてだつた。その時不思議なアザを持つた少女、すなわちそなたの母、オピウムにあらうことか一眼で虜になつてしまつた。その後義兄となつた皇子や姉にオピウムを私の妻に欲しいと願い出た。姉夫婦は乗り気だつたのだが、前王と肝心のオピウムが承知しない。そうこうしていのうちにあの2人、ジェイムズとバーナードがやつて來た。ジェイムズが言葉巧みに誘つたんだろう、オピウムは奴と一緒になると言い出した。すると手の平を返したように皇子も賛成だした。相変わらず王は反対していたが、オピウム可愛さの余り、とうとう承諾してしまつた。それから五年。お前が生まれ、2人は一層幸せになつた。ところが原因不明の病が発生し、数多くの村人が死んだ。神がやつと私に力を貸してくれた、と思つた。時を見計らい、よそ者がいるからこんなことが起こるのだ。とデボンに噂を流させジェイムズ親子を追い詰めこの地から追い払つた。今度こそ！と傷心のオピウムを慰め、己が妻にと試みた。結果……それまで以上に彼女から疎まれるようになつてしまつた。それからというものオピウムは他家へは嫁がず、一生1人のまま……そしてお前がここに来る前に死んでしまつた。生きる糧を無くした私は、ジャスミンにそれを求めた。だがそれも叶わぬと知ると、どうしても王になりたいと願うようになつた。どんな手を使っても王にならねば私の生きる意味がなくなる！

その一心で一度は妻に、と願つたジャスミンをさらつたのもその気持ちからだつた。しかしお前のアザを見た瞬間、心の中に隙が出来て墓穴を掘つてしまつた。”汝、2つの月が出づる時、全ての民は救われる”お前が來るまでのこの谷は一見平穏だつた。だが私がい

るせいでどれだけ現王が苦しんでいたかわからぬ。2つの月の意味
はそういうことだったのだろう。結局私の人生はオピウムに始まり
オピウムで終わる。ということなんだろうか・・・フフフフ・・
ハハハハ・・・

天井を仰ぎ、高笑いするヤゴブの声が空しく響いた。

ヤコブの悲しい、しかし第三者から見れば身勝手な告白を聞き、やるせない気持ちのまま王の寝室に戻ったケインは、言葉を選びながら王と彼の安否を気遣いながら待っていたジャスミンに事の仔細を報告した。

話も終わりに差し掛かった頃、廊下で侍女と兵士達のわめき声が聞こえてきた。それもこぢらの方へどんどん近付いてくる。彼等の声の合間にケインを呼ぶ声も混じっていた。耳を凝らすとそれはスージーのものようだ。

ケインとジャスミンが廊下に出ると、それはやはりスージーで、ケインの姿を見つけると一目散に走ってきてそのまま抱きついた。

「ねえ、ケイン！ もうこんな所イヤ！ 早く帰りましょう！ 私あなたと一緒にならジュディーや先生がいなくても生きていけるわ！ 私ずっと前からあなたが好きだったの！ ジュディーはジャックが好きだった。私ジュディーの後輩というのを利用してあなたに近付いたの！ ねえ！ もうイギリスへ帰りましょう！」

涙ながらの大告白にそこに居合わせた全員が唖然となつた。更にスージーはありつたけの想いを込め、呆然としているケインに濃厚なキスをした。それをまさまさと見せ付けられたジャスミンは何も言わず走り去つてしまつた。そこで我に返つたケインはスージーの身体を押しのけるとすぐジャスミンのあとを追つた。そのあとを追うスージー。そのまたあとを追う侍女と兵士達。

ベッドに横たわり一部始終を見ていた王はニヤリと笑い、更にポツリと呟いた。

「モテる男は辛いの。ケイン。」

「待てよ！ジャスミン、待てつたら……！」
以外に足の速いジャスミンに驚きながらも、部屋に付く頃には追いつき、中に入るとケインは素早く後ろ手にドアを閉め鍵をかけた。
後から来るスージーを入れないためもあつたが、何よりここではつきりさせておかなければならぬないと考えたからだ。

ジャスミンはベッドに身を投げ出すように倒れ、その傍に近寄り腕を取ろうとしたケインの手を逆に跳ね返した。

「ジャスミン聞いてくれ！」

ケインの必死の言葉にも首を横に振るばかり。

「じゃそのままいいから僕にも釈明させてくれ。確かに僕達4人は大学でも仲が良かつた方かもしない。けどジユディーがジャックを好きだつた事も、増してスージーが僕を好きだつたなんて全然知らなかつたんだ。だからさつきは本当に驚いた……」
その言葉に嘘はなかつた。現に声のトーンが段々と落ちていくのが分つた。

「でもスージーはそうじやなかつた！」

「本当に知らなかつたんだ。信じてくれ。」

ジャスミンはケインの傍から逃れるように部屋の隅に移動した。

「いいのもう！いづれあなたもお帰りになるのでしょうかから。」

「だから僕の話を聞けって言つてるだろう……！」

バン！と彼女の身体を挟むように壁を叩く。怯えながらその顔を見上げるジャスミン。目と目が合つた。お互いの瞳の奥に熱い情熱がほとばしる。その時ジャスミンはケインのアザが今まで見たどの時よりも鮮やかに浮き上がつているのを見た。

ケインはジャスミンの顎を上げ、スージーが自分にしたよりも尚激しいキスをした。今まで数回ケインのキス（口移しで薬を飲んだのも含め）を受けたジャスミンだったが、これは比べものにならなか

つた。

「やめて・・・」

辛うじてそれだけ言つと更にジャスミンは逃れようとした。だがもう止められない。

「駄目だ。 離さない。」

ケインの声も掠れている。

「スージーが来るわ・・・」

「大丈夫だ。兵士達が取り押さえている。」

「駄目よ！――」

逃げようとするジャスミンの腕を押さえ、ケインは部屋中の灯りを消した。

ケインの腕の中でジャスミンは幸福感の絶頂にいた。ケインも又同じ気持ちだった。

「僕はここに残ろうと思っている。王から後継者に、と言われた時は驚いたけれどそんな事は問題じゃない。だから君とこうなつた事について謝るつもりはない。僕は・・・」

そこでケインは一呼吸置いた。

「僕は君を愛している。それがここに残る最大の理由だ。 君は？君は僕をどう思つているの？」

「・・・わたくしは・・・あなたと出会う前からずっとあなたを・・・お慕いしておりました。」

ほんのり頬を赤く染め、ジャスミンもケインの心に応えた。

「じゃあ決まりだ！」

そこで身体を起こすとケインは姿勢を改めた。

「ジャスミン。僕と結婚して欲しい。いとこ同士だと言われようと構わない。僕は生涯君だけを愛すると誓つよ。」

力強いプロポーズの言葉に涙をこらえきれず、両手で顔を覆うジャスミン。しかしその涙の本当の理由を知る由もないケインは、次に彼女の口から出た言葉に愕然となつた。

意外な告白

「ケイン様。今まで隠していた事があります。……わたくしは・・わたくしは・・現王である、父、ムファードの・・・・・ 実子ではありません。」

涙でボロボロになつた顔をものともせずジャスミンは語り始めた。

「えつ？！」

（何故彼女はその事を知つてゐるんだ！）

疑問が黒い渦となつて彼の心を覆つた。

「ごめんなさい。今まで黙つていて。……わたくしがこの事こ実を知つたのは7歳の誕生日を迎えた日でした。お父様の部屋へ誕生の挨拶に行くと、お父様とカシミールの父、デリルが2人で話していたのです。実の父親が。というような内容でした。それまで実の父と慕つてきた方が本当は違つていたという事実は、わたくしにとって非常にショックな出来事でした。それ以後の父のわたくしへの慈しみがなければ今のわたくしはなかつたでしょう。ですからわたくしもその事は考えまいと心に決め、今日まで生きてきたのです。けれどあなたにさきほどいとこ同士でも構わないと言われた瞬間、これではいけない、真実を告げよう。その上であなたの決定を受けなければならぬ、と思つたのです。」

「・・・・・それで君は、僕がそれほどの重大事を黙つていた人は結婚できない。と言つたらどうするつもり？」

既にその話を知つてゐるという事実を悟られまいと彼は努めて冷静に聞いた。すると彼女の肩がブルツと震え、大粒の涙がポロポロとこぼれた。

「そ その時は わたくしは・・・」

それ以上言葉が続かない。ケインは彼女の傍に腰を掛け、そつとその肩を抱き寄せた。

「悪かつた。君があまりにも真剣だつたからちょっとからかつてみ

たんだ。僕はたとえ君が誰であろうとこの意思を覆すつもりはないよ。エローラの丘での悪巧みを聞いたときからどんな事があるても君を守ろうと決めたんだからね。何も心配しなくていいんだ。そんな事で悩んでいたのか。僕がもう少し早く気付いてやればこんなに苦しませずに済んだのに。ごめん。・・・・れあ、もう何も考えず少し眠った方がいい。」

ベッドに横たわる彼女の額に優しくキスをし彼女が眠るまでその手を握つてやつた。完全に眠ったのを確認すると、ケインは王に会うため部屋を出た。廊下はさきほどどの喧騒が嘘のようになまり返つていた。

真実（1）

（これからどうすればいいのだろう。）

自問自答を繰り返しながらケインは王の部屋へ向かった。

「陛下、少し宜しいでしょつか。」

ケインが入っていくと、王はカシミールと話し込んでいた。ふと彼はさっきまでの行動全てが既に王の耳に入っているのではないか、と思った。しかし今となつてはそんな事はどうでもいいことだ。自分はこの谷に残つて彼の後継者になることにしたのだから。今更ジャスミンとの関係がバレたからといって慌てる必要はない、そう思い直した。

「おお、ケインか。構わぬ。」

カシミールはそれを汐に出て行つた。

「何じゃ？ 用向きというのは。」

「僕はこの谷に残る事に決めました。」

「おお！ それではジャスミンと一緒に私の後を継いでくれるというのじゃな？！ 嬉しいぞ！ ケイン。」

「はい。そこで陛下に伺いたいことがあるのです。僕は真実が知りたい。僕の問いに答えていただけますか？」

真剣な彼の表情も今の王には通じない。ホクホク顔を見ただけでもそれが窺えた。

「何じゃ？」

「单刀直入に伺います。ジャスミンの本当の父親は誰なんですか？」

思いもよらぬ質問に王の顔つきが変わつた。

「誰に聞いた！！」

「僕には聞く権利があると思います。」

「誰に聞いたと言つておる！！」

「この秘密を知っている者が誰かお考えになれば明白でしょう。誰

かは僕からは言えません。」

「陛下！彼をお呼びになつてどうなさるつもりです！それよつての秘密をジャスミンが知つていた、ということを陛下は」存知でしたか？」

「何と！何と申した！」

「ジャスミンは自分が王の実子ではないと言つてました。7歳の誕生日に陛下がデリルとここで話されていたのを聞いてしまった。と告白してくれました。ただ陛下の自分に対する態度が全く変わらないのでそれを忘れようとしたそうです。だからこそ、僕には真相を聞く権利があると思うのです。お願ひです！陛下。もし真実を話して下さったのならそれは一生この胸の奥に收め、誰にも話しません。教えてください！陛下。」

「…………そなたのアザはもう隠れることはないのか。…………

・・・ジャスミンの肌は美しくキメが細やかであつたろう? そのアザ
が消えないのは、そなたの愛が余程強かつたという証拠じやろう。
・・・あの子の肌の美しさは母親よりもむしろ父親の血をより強く受
け継いでいる。 私は皆にその秘密が判らぬように注意を払つ
てきたつもりじゃつた。 それなのに・・・臣下の者は誰一人、気付

かなんだのに。肝心なあの子に知れてしまつとは・・・約束していく
れるか?これから話すこととはあの子のみならず、誰にも話さぬと。

王は握った手に力を込めた。ケインは期待に応えるよつに無言で頷いた。

「…………ジャスミンの母親がここに嫁いで来たのは25年前の事だつた。当時私はまだ皇子であつたが、次期王になることは既に決定しておつた。婚礼の祝典は7日間続いた。だが私にとつてそれは地獄のような7日間じやつた。何故ならそれが終わり、妃と2人になつた時こそ「」が秘密を明かさねばならぬのだから。カシミールに聞いたのなら今更それが何であるか言わなくとも良からう。・・・・そなたにはそういう病はないか？」

「いいえ。僕は・・・」

「そうか。それなら良い。もしかするとジャスミンはもう母親になたやも知れぬな。・・・あの時の悔しさは誰にも理解してもらえぬだろう。」

いよいよその時がやつて來た。私は寝所に入り、妃と2人きりになつた時、どうせわかることだからと正直に事実のみを伝えた。話が終わると妃は私を責めることもせず声さえも立てず泣いた。それを見た私はわが身の不幸を思い一緒にになって泣いた。一応床入りは済ませたが、妃の悲しみは私の想像をはるかに超えていた。それからというもの何かに取り付かれたかのように薬草にめり込んだ。おそらく私の病を治そうとしたのだろう。あらゆる草花を育て始めた。それから2年後、ジェイムズが現れオピウムと結婚するや否やそなたが生まれた。それが妃の悲しみを一層深いものにした。無論表には出さぬが私にはそれが痛いほどわかつた。それまでより薬草に力を傾けるようになつたからだ・・・」

そこで王は一息ついた。疲労感がどつと押し寄せたように見えた。ケインは王が話し出すまでじつと待つことにした。

「更に5年。ジェイムズ達がここを去ったのを機に兼ねてより私が考えていた計画を妃に話した。別の男の子種を貢つて跡継ぎを産んで欲しいと。妃は驚いたが後継者がないのではこの谷は滅亡してしまう。それを盾に私は妃を説得した。相手の男はデリルが選び、何度かこの谷にやつて来た。私はそれを断腸の思いで見ているしかなかつたのだ。

それから数ヶ月が経つた。妃に懷妊の兆候が現れると間もなくその男は姿を見せなくなつた。そして生まれたのがジャスミンなじや。

王は淡々と話を続けた。

「それでその相手の男といふのは。」

「・・・現、清国皇帝、宣宗。^{せんそう}といふ話じや。・・・あの頃はまだ私より地位の定まらぬ男であつたが、今から8年前、皇帝の座に就いたと聞いた。妃から宣宗の事を聞いたことはなかつたが、デリルの話によると、血氣盛んな若者であつたが、近習の者達にはとても優しく、勿論妃に対しても物腰は柔らかであつたということだった。ジャスミンの名も清国の呼び名は茉莉花^{マリファ}といふ、それは美しい花から取つたものだ。あの子は宣宗と我が妃の良いところだけを受け継いでいると思う。どんな手段であれ、私に子が授かつたのだ。一生大事にしようとこれまで慈しんできた。だが年月を追う毎にオピウムの産んだ子の消息を知りたくなつた。私にとつて唯一血の繋がつた者だつたから。できれば私の後継者に、と考えるようになつてしまつた。私はデリルに命じ、そなたの行方を捜した。苦労の甲斐あつてイギリスに住んでいたといふことがわかつた。バーナードの所在はわかつてはいたから、彼を通じそなたがここに来たくなるように仕向けて貰つたのじや。ああ、勘違いされでは困るが、だからと言つてジャスミンに対する態度が変わる、といふものではな

い。あの子は私の娘だ。だが息子と娘で必ずと周囲の期待するものが異なる。娘はやはり女なのだ。そなたをこの数ヶ月見てきてその思いは強くなるばかりだった。・・・ケイン。あの子の素性は決して怪しいものではない。親子として名乗り合つことは決してないが、あの子は生まれながらの皇女なのだ。分つてくれるな？」

じつとケインの目を見つめる王の目から幾筋もの涙が流れていった。

「はい。」

同じようにケインの目からも涙が流れた。

「では一つ聞くが、今の話を聞いて、ジャスミンに対する気持ちに変わりはあるか？」

「・・・陛下。僕が眞実を知りたいと言つたのはそんなことではありません。彼女に対する気持ちには些こぢやかも変わるものではありますんし、聞いたことによつてこの先ずっと彼女を守るのは自分しかいな、と痛切に感じました。・・・陛下、改めてお願いたします。僕を陛下の息子として、又、ジャスミンの夫としてこの谷に一員に加えて下さい。」

「おおおおお！そつか！嬉しいぞ。ケイン。私は今までこんなに嬉しいと思つたことはない！そつじや！早速婚礼の支度じや！」

「待つて下さい！その前に僕はしなければならないことがあります！」

ケインは再び居住まいを正した。

「鬼追つものには鬼をも得る?」

「何じゃ。私の決定に水をさす様な事を申すな。まあ良い。申してみよ。」

「学校の事と父の事です。父は今も突然フイとどこかへ行つたまま帰らない、という生活を続けていますが、僕がここに住んでしまつたら父の帰るところが無くなつてしまふのではないかと・・・」

「ケイン。そなたは子でありながらジョイムズの事をまだ判つておらぬようだの。あの男はそんなことで泣いてわめくような男ではない。何事もなかつたような顔で今にもここに現れるような気がするぞ。しかしそなたがそれほど心配するならカシミールに命じて様子を調べさせよう。それと学校の事じやが、そなたの希望はどうなのじや?」

「僕は一度戻つてちゃんと卒業したいと思つています。」

「あとどれ位残つてゐる?」

「本当は今年の7月で卒業だつたのですが、ここに来くる時に休学の手続きを取つてきましたのであと2ヶ月ほどです。」

「2ヶ月か。・・・・分つた。2ヶ月待てばそなたはここに戻つてくるのじやな?」

「はい。必ず。」

「その言葉きつと忘れるではないだ。もし自信がないのであれば私の方でも手段がないわけではないからその手を使つても良いのだが。」

「どういふ意味ですか。」

「簡単なことじや。免除してもらひのじや。」

「免除?」

「そうじや。私にはそれができる。」

「そんなことができるわけがありません。」

「出来るかどうかやってみなくては分るまい?」

「どんな事をするつもりかわかりませんが、この件に関しては陛下を煩わせたくないありません。どうか一旦僕が帰国するのをお許し下さい。お願いいいたします。」

「私に任せればそなたは一挙に今すぐ三つの宝を得ることができるんじゃがの。」

「3つの宝？」

「1つはジャスミン、2つは次期王、3つめは卒業じゃ。」

「陛下。何事も1つづつ解決しなければなりません。一度に宝が入ったのではありがたみがなくなります。僕は今のままで充分なんですから。最高の宝が手に入つたんですからね。」

「最高？」

「ジャスミンです。彼女は世界一の宝です。ですからあとは僕が努力して手に入れます。どうか僕の帰国を許可して下さー。」

「そうか。そこまで考えておるのなら許可せねばなるまいの。・・・良かう、一旦帰国しなさい。じゃが必ず戻つてくると誓つてくれ。良いの？」

「はい。必ず。」

そつ言つと2人は固く手を取り合つた。

翌日。アーサーの亡骸が荼毘に付された。スージーはあの後、事情を聞いたジャックに諭され漸く彼の死を静かに受け止める事が出来た。

葬儀はヒンズー教の儀式に則つて行なわれたが、谷全体が1外国人の死を悲しんでいるように思えた。アーサーは敬虔なカトリック教徒であつたが、それは本国に帰つてから、ということで宗教の壁を超えた厳かな式になつた。それは一昼夜続いた。

滞りなく葬儀が終わると、ジャックはケインと王に谷を去る旨を告げた。勿論スージーも一緒に。ケインがその理由を尋ねると、アーサーの死をイギリスで帰りを待つている家族に伝える義務と、発見したばかりの石窟寺院群（ジャックは独自に発掘作業をし、あの洞穴の奥にはまだ数個の建造物があることを突き止めていた。）の調査をするために新たな調査団を結成して舞い戻つてくるためだと答えた。

出発の日について尋ねると、すぐにでも。と彼の決意は固い。

「ケイン。君はどうする？俺達と帰るのか？」

「僕も一緒に。と言いたいところだけれど準備が追いつかないんだ。君達より少し遅れるけれど帰るよ。将来どうするにしても一旦帰つて学校を卒業しなくてはね。でも急に帰るなんてどうして？」

「これは単なる思いつきじゃないんだ。ここに着いて調査を始めた頃から教授と話していたことなんだ。人数が不足しているから折をみて大学にその旨を報告し、人数の増加を頼もうってね。教授の死と新たな発見がそのきっかけを作ってくれた。だから俺はなるべく早く帰る。」

「・・・・そうか。・・・・わかった。・・・じやあ一旦お別れだな。」

ケインは名残惜しそうに手を出した。

「何だよ。今生の別れみたいに。」

確かに当時の別れは一度と言えないことも意味していた。それほどイギリスとインドは離れていたのだ。

「そうだな。すぐ会えるだ。」

「そうだよ。でもこの次会うときはこんな風に話せないかもしないな。」

ジャックもケインの出した手をがつちり掴んだ。双方の目に涙が滲んでいる。

「そなた達を見ているとジョン・ライムズとの別れが昨日の事のようになる。私達がそうであるようにそなた達の友情も変わる事はないであろう。」

「・・・陛下。いろいろお世話になりました。いつになるかわかりませんが、必ずまた戻ってきます。」

「無事に航海を終える事を祈っている。」

スッと立ち上がるとジャックは身を翻して部屋を去った。一度も振り返ることなく。そしてスージーと共に荷物を整え、兵士達数名に伴われながら谷を去つて行つた。

その姿を自室の窓から見送ったケインは、（僕もすぐ帰るよ。）と決意を新たにした。だが、その決意もあることをきっかけに不可能になってしまった。

心なりやむ・・・

ジャックを見送りさて今度は自分も、と準備をしようとケインのもとにカシミールが何事か伝えるために急ぎ足でやって来た。

「どうしたんだ？」

「はい。実は王の容態が思わしくないのです。」

「え？ ジャックを見送ったときは何でもなさそうだったけど。どうして？」

「はい。私もそれは存じておりましたので、ブレーナムから聞かされたときは耳を疑いました。」

「一体どう良くないんだ？」

「侍医の話では右側の身体が動かない、ということなのです。痺れているような感覚だとも申しておりました。確かに右手足に力が入らないと王も仰っておりました。そう言つた言葉もはつきりしないと言いましょうか、何を言つているのか私には理解できませんでした。侍医の通訳で漸く判断できた、という有様です。・・・ケイン様、どうか王のもとにいらして下さい。ジャスミン様も不安がつておられます。」

カシミールの話す言葉も不安がありありと見て取れた。

「わかった。すぐ行く。」

ケインはカシミールと一緒に王の寝室に向かつた。

「ケイン様。」

ケインの姿を見たジャスミンは目に涙を溜めていた。ケインはジャスミンに軽く頷くと王のベッドに近付いた。

「先生、如何ですか？」

「以前から兆候があつたのかもしませんが、右側の運動能力が極端に衰えておられます。衰えているといつより全く機能しておりません。加えて舌が回りず言葉がはつきりしません。」けいらの言う事

は理解されておられます、恐らくそのままの状態が続くと思われます。」

「と黙りとへ。」

「はい。政事はもつ出来ないとみなさなければならぬことござります。」

「全く駄目か？」

「はい。恐りぐ。」

「何てことだ……」

呆然とするケインに侍医は更に付け加えた。

「このままいけば良し、そうでなければ明日をも分らぬお命、と申し上げます。私は気休めを申し上げるつもりはありません。昔からそうしてまいりましたし、王もそういう私の気質を好まれました。ですからあえて申し上げます。今の王にとつて最良の治療はどんな小さな衝撃も与えない、ということです。」

「もし、もし僕がこの谷から出で行つたひへ。」

「とんでもありません！そのようなことをしたら現実になつてしまします！ケイン様、医師のわたくしからのお願いです。どうかこのままここにお留まり下さい。」

必死に懇願する侍医にケインは何も応える事が出来ず部屋を後にした。

自室に戻るどがつづくつとソファに身体を投げ出した。

（王を見殺しにしてこのまま帰国していいのか……）

ケインの心は王への忠信と愛国心の2つが泳ぐよつとコラコラしていた。

王の具合が悪くなつてケインの予定は総崩れになつた。一度本国に帰国し、大学を卒業してからまた再びこの地を訪れようと考えていた。しかしこうなつてからはジャスミン一人残していくわけにはいかなくなつてしまつたのだ。確かにカシミールがいれば少しの間政事は何とかなるかもしれない。問題は王という存在だ。口に出してこそ言わないが、カシミールも不安を隠しきれない様子だ。ジャスミンに至つては全面的にケインに頼りきつている。あのプレーナムでさえ些細なことでケインに伺いを立てているのだ。本当に困つた。こんなとき相談する相手がいれば何とか解決策も見出せるのに・・・ケインの心はプレッシャーに押しつぶされそうになつていた。

何の進展もないまま1週間が過ぎた。谷の重臣たちは益々ケインに頼つてきていた。王が発表したこともあり既にケインへの重臣たちの信頼度は100%を超えていた。ケインの発する言葉はそのまま直後実行されていたしそれがことごとく的を得ていたからだ。執務室でその日の陳情書に目を通していたケインにカシミールが用向きを伝えに来た。

「ケイン様。王がお呼びでござります。」

「王が？ 良くなつたのか！」

「いいえ、そうではありません。ただケイン様をお呼びしろとの」
命令です。」

「わかつた。すぐ行く。」

一縷の望みをかけたが無駄だとわかるとケインはため息をつきながら王の寝室に向かつた。

「陛下。ご機嫌麗しく・・・」

礼儀に則つてお辞儀をするケインをジャスミンが素早くベッド脇に呼び寄せた。王が何やら話したいらしい。震える手でケインの両腕を掴み耳元で殆ど聞こえない声で話す王。ジャスミンの通訳で何か要約をつかむ事が出来た。つまりはこうだ。自分はもう役に立たないからケインに今すぐこの谷の王になつて欲しい。そして民衆のための政治を行なつて欲しい。重点はその二つだった。王の願いにあいまいな返事をしてケインは寝室をあとにした。すぐ返答できる問題ではなかつたからだ。だが早急に答えを出さなければならぬ事は彼が一番良く知つていた。執務室に戻つたケインを待つていたものは大量に重なつた陳情書だった。

それを見た彼の心は決まつた。いや既に決まつていたものを再確認させられたのだった。

2ヶ月が経った。芥子の谷では二十数年行なわれなかつたお祭りの準備に入々が浮かれていた。特にその一切を任せられたカシミールとプレーナムは、相変わらずキャーキャー言い合いながらその準備に追われていた。勿論上位に立つてるのはプレーナムである。あれだけの活躍をしていながらもカシミールはまだプレーナムにその実力を認められていないようだ。

谷の人々全てが楽しみにしていたお祭りの中心にいる人物、即ちケインとジャスミンは周囲の慌しさとは全く無縁のように王に付きつ切りで政事や慣習について学んでいた。だがそれもプレーナムによつて度々中断された。お祭りとは言わずもがな、ケインとジャスミンの谷を上げての結婚式だつた。

そこに至るまでのケインの心境は複雑だつた。苦労して習得し、卒業後は天文学者として名を馳せる、というのが夢だつたのにそれが叶わないばかりか、こともあろうに中途退学しなければならないのだから。それでも彼は谷の人々から受ける期待と感謝の声を裏切る事はできなかつた。それで留まることにしたのだ。その決意を告げると王ばかりか噂を聞きつけた谷の人々が宮殿に押しかけ、ケインに溢れんばかりの感謝を述べた。無論ジャスミンの喜びようは尋常なものではなかつた。何度もケインに真偽を確かめ、真実だと認識するまで数日間かかつた。ケインの残留が明らかになるとすぐ式の準備が始まつた。

「もう一お二人とも」自分達の事なんですから少しは考えて下さい！ちつとも本気にならないんだから！」

「悪いね、プレーナム。全部きみに押し付けた形になつて。でもきみだからこそ僕達は安心していられるんだよ。これからも頼むよ。」

「まあ、まあケイン様。私そんなつもりじゃ。ええ！任せて下さいしーお一人の事はこのプレーナムが一生かけて面倒見させて貰います！」

上機嫌でプレーナムは侍女達を引き連れまた仕事にかかりに行つた。

「そなた達も大変じゃの。あのプレーナムと一生付き合つていかなければならないとは。あれではあの子は一生独り身を通しかねない。まあこの谷である子を嫁に貰いたいなどといつ醉狂な男はないと思うがの。」

王の病氣はこの2ヶ月で随分改善され、たどたどしいが人を介さず会話が出来るまでになつていて。それでも今の言葉を発するには大変な労力を要した。

「お父様つたらそんな事仰つて。プレーナムが聞いたら怒りますよ。」

「そうであったの。今のはここだけの話にしておくれ。あの子は母親そつくりじや。あの子の母もお前の母のために生涯を捧げてくれた。」
「冗談はさておき嫁の貰い手を真剣に探してやらねば可哀想じやな。」

「そうですね。」

横を向いたジャスミンの目に涙が光つた。プレーナムの身の振り方も心配だが父の回復が何より嬉しいのだ。

「陛下。その事ですが、もしかすると灯台下暗し。ということはありますんか？」

「どういう意味じや。」

「いえ。ただ何となくですが。そういう気がするのです。」

「そう・・・か。・・・オーそつか、そつか、フムなるほどのお。」

「え？お父様。一体それは誰ですか？・・・ケイン様。わたくしにも教えて下さい。誰ですか？」

しかし男2人は互いに納得したように頷くと話はそれでおしまい、とでも言つようにその件に關して口を閉ざしてしまつた。それを汐

にケインはジャスミンを伴い王の部屋を辞去した。その後姿を見送った王の目にも涙が光っていた。

瞬く間に1ヶ月が経ち、ケインとジャスミンの結婚式当日となつた。ケインの決意を受け、カシミールがイギリスの大学に退学届けを提出した。これで否が応でも芥子の谷に骨を埋める決心が固まつた。次期王としての公式発表を待つばかりとなつた。それについてはカシミールの演出により結婚式の最中民衆に告げられることになつていたが、詳細はケインにさえも極秘裏に進められていた。

朝早くからジャスミンは花嫁衣裳を着せられていたが、ケインは時間ギリギリまで公務の引継ぎを行なつていた。

正午の鐘と共に式が始まつた。この日ばかりはムファード王も不自由な身体を押して出席していた。型通りの司祭の言葉が終わつた後、インド式と英国式双方取り入れたような豪華な式になつた。

「それでは誓いのキスを。」

司祭の言葉にケインはジャスミンの目をじっと見つめた。この谷に来てからの事件が瞬時に思い出された。仲間の死、ジャスミンとの出会い、自分の出生の秘密、政権争い、アーサーとジュディーの死、そして何より親友ジャックとの別れ・・・さまざま想いを胸にゆっくりと自分の唇を花嫁の唇に近づけた。

「諸君！おめでとうーー！」

その時大きな声が教会中に響き、誰かが入口から入つてきた。

「・・・父さん！－」

「ジエ・・・イム・・ズ」

ケインと王が同時に叫んだ。

「やあケイン。しばらくーーー皇子・・いや、陛下。お久しううござります。お体を壊されたと村人に聞きましたが如何でござりますか？」

「ジョイムズ。・・・君は・・・相変わらず、驚かせる奴だ。」

ガシツと抱きあう初老ともいえる2人の男の間には、数十年という時の流れを感じさせないものがあった。

「父さん！今までどこに行つてたんだ！」

ケインはまた子供の立場から咎めるように言った。ところが当のジエイムズは全く気にする風もなく、

「ケイン。久しぶりに親友に会つたんだ。野暮な話はしないでくれ。・・・おお！君がジャスミンか。何という美しさだ！私の愛したオピウムに匹敵するくらいだ！ケイン、上手くやつたな！ハハハハ！」

ケインの父、ジョイムズが突然闖入してきた事で式は中断を余儀なくされた。その余波なのか、主役だったケインとジャスミンは教会の外に押し出されてしまつことになつてしまつた。彼らの姿を見た村人達が人々に祝福の言葉を投げかける。仕方なく2人も手を振つてそれに応えた。

後方から車椅子に乗せられて來た王がカシミールに何かを指示した。カシミールは人々に向かつて静かにするよう手をかざした。すると民衆は一瞬にして静まり返つた。

「・・・この目出度い席で発表することがある。・・・私、アブド・ドノファン・ド・ムファドは今この瞬間、王の座を退く。新王にこのケイン・スタンフォードを指名する。ここにこの事を宣言する！」

「えつ！・陛下、それは！」

驚いたケインが抗議したが、彼の言葉は民衆の歓喜の声にかき消されてしまい、王とカシミールはしてやつたりとばかりにケインにウインクして見せた。またしても止む無くケインは人々に向かつて手を振らなければならなくなつてしまつた。単に王家の結婚式だったはずなのに、これによつて戴冠式も兼ねてしまつ事になつた。

2度目の夜

戴冠式を兼ねた結婚式は、昼夜を問わず7日間続いた。その間主役の2人は仮眠程度しか取る事が出来ず、2人きりになるどころかゆっくり話すことすら出来なかつた。結局周囲が彼等を解放し、やつと落ち着くことができたのは10日目の夜だつた。

ジャスミンのたつての希望で新居となつたのは、今まで彼女が使つていた部屋に少し手を加えたものだつた。また以前あつたケインのベッドは取り除かれ、大人3人が横になつてもまだ余裕がある大きなものに変わつていた。勿論ジャスミンのも跡形もなく消えていたことは言つまでもない。

「フーー疲れたあ。結婚式がこんなに大変なものだつたとは知らなかつたよ。ちょっと甘く見ていたなあ。」

巨大なベッドに仰向けに倒れこみ、ため息交じりにケインがこぼした。

「じめんなさい。でも谷のみんながあなたを慕つてているということがこれではつきりいたしましたわね。」

ベッドの側にあつた椅子に腰掛けながらジャスミンがすまなそうに答えた。清国から取り寄せたシルクで作つたドレスがとても清楚で美しい。ふとケインの脳裏にある考えがひらめいた。もしかしたらこのドレスは現清国皇帝が、名乗り合えない娘のために内緒であつられたものではないのだろうか？・・・あるわけないか・・・皇帝は生まれたのが男か女かさえも知らないのだから。むしろ無事この世に生を受けたかどうかも知らないかも知れないのだ。いいや、今は他の事を考えまい。目の前の花嫁だけを見つめるだけでよいのだ。

ケインはゆっくりと立ち上がり、恥らうジャスミンの手を取りベッドに横たわらせた。

「君は僕のものだ。」

「あなたはわたくしのもの。」

ケインの情熱の炎は再びジャスミンに火をつけた。

それが発端とな

つて2度目の夜が過ぎていった。

翌朝。引退したとはいまだ大きな影響力を持っているムファード前王に2人は結婚の報告をしに行つた。そこには何故かジェイムズの姿もあつた。

「父さん！何故ここに？」

「ケイン様。お父さんは前王の希望を聞き入れて下さいました。」

ムファード前王に代わり、カシミールが代弁した。

「希望？父さん、また何かやつたんだろう？」

「ケイン。私が何かやろうとするとどうしてお前はそうなんだ？少しは私を信用してもらいたいものだな。」

「信用？これまでの父さんのしてきたことを思い出してみて欲しいな。一体なにをもつてして信用なんて言葉を口に出来るんだ？」

「ママママお二人ともこのへんでおやめ下さい。ケイン様、実はジエイムズ様は余生をこの谷にお暮らしになられるそうでございます。それが前王の希望でござります。古き友人として前王をお慰めしながらこの地で最後を迎えることになります。」

「この谷で暮らす？本気か？」

「そうとも！私も孫の顔が見たいからね。それにオピウムの墓を守つて余生を過ごしたくなつたんだ。・・・ジャスミン、私がここにいたら迷惑かい？」

「いいえ。お義父様。わたくしもそうしていただきたいと思つておりました。」

嬉しそうに答えるジャスミン。昨夜の顔とは打つて変わつたしとかな物言いに驚きながらも、ケインは幸せを感じていた。だがこの父が一緒では・・・相反する気持ちでしぶしぶ承諾した。

その日から新王ケインの政治が始まった。前王の業績をそのまま継承し、尚新しい産業を開発する。彼は文化面で得意分野の天文

学に力を入れることとし、また生産面では芥子の花の栽培を縮小し、気候に合った綿花の栽培を推奨した。それは以外にも旅から旅の生活を続けていたジェイムズの発案だった。それはのちに英國が興した東インド会社設立の先駆けとなるものであった。

それから5年の月日が流れた。ケインとジャスミンの間には4歳の男の子と2才の女の子が生まれ、翌年また第3子が産まれようとしていた。彼の血を受け継ぐかのような印章が生まれながらにして長男の額にはつきりと認められた時、ケインはその伝説の意味を実感した。

”汝、2つの月が出づる時、全ての民は救われる” . . .

ケインの治世は村人達に受け入れられ、以前にも増して平和になっていた。前王ムファードが崩御したことは残念であつたが、その分、何故かジエイムズが張り切っていた。

話が前後するが、ムファード王が気にかけていたプレーナムの嫁入りはケインの思惑通り、カシミールが最有力視されていた。しかし当のカシミールは侍女のミンミンとさつさと結婚してしまい、彼女はあぶれてしまった。カシミールとプレーナムが大本命といろいろ計画を立てていたケイン達の話に、プレーナムは大激怒した。

「誰がこんな役立たずと結婚するもんですか！ケイン様、私を馬鹿にするのもいい加減にして下さい！」

プレーナムがそう言えば、カシミールも

「わ・私はプレーナムさんとけ・結婚するつもりはありません。そんなことをしたら私は一生頭が上がらない男になってしまいます。お願ひです、ジャスミン様！それだけは勘弁して下さい！」

泣きながらジャスミンに懇願した。これで彼女の嫁入りも暗礁に乗り上げた、と目されたのだが、ある人の出現で案外あつさり片がついた。

一旦イギリス本国へ戻ったジャック達は、アーサーの弔いを済ませると、再び発掘に取り掛かるべく人数を募った。人数はすぐに集まつたものの資金がなかなか集まらず、ジャックが船上の人になつたのは帰国してから既に3年の月日が経つていた。

芥子の谷に足を踏み入れるとジャックの脳裏にはケインと別れた日の事がくっきりと蘇つた。目の前に広がるジャングルはあの日と全く変わらずジャックを迎えてくれた。知らずに涙がこぼれていた。

一度と会えないと思っていたケインは、ジャックの再来に喜び、村を上げて歓待した。ただスージーだけは考古学への興味がなくなつたとみえて一緒に来るとは言わなかつたようだ。

ジャック達が来てから1週間後。突然ケインとジャスミンはジャックから思いもよらないことを聞かされた。なんとプレーナムと結婚したいというのだ。既にプレーナムも了承済みだという。その時になつて初めてケイン達はプレーナムがカシミールとの話に乗つてこなかつた理由を知つた。きっかけはあの誘拐事件の救出劇らしい。気を失つていたプレーナムを必死に介抱し続けたジャックに、鉄の意思を持つていたプレーナムの心に思わぬ恋心が芽生えたのだった。ジャックも石窟寺院発掘に生涯を捧げるべくこの地に骨を埋める覚悟をしてきていた。

慌しく結婚式が執り行われ、彼もまたケインと同様芥子の谷の住人となつた。

(これでいい。安泰だ。)

ケインとジャスミンはそれぞれの想いを胸に、これからの中も2人で力を合わせ谷を守つていこうと誓い合つた。

ケイン達が幸福の絶頂にいる頃。インドを取り巻くアジア情勢は最悪のものになっていた。

清国皇帝、宣宗が発令したアヘン輸入禁止策は、イギリスとの間に一年にも及ぶ戦争を引き起こした。いわゆるアヘン戦争である。イギリス軍の総指揮官エリオットは廣東港を起点に次々と清国軍を打破し、総指揮官、林則徐を追い込んだ。更に、戦に破れた皇帝から植民地としていくつかの領土を差し出させた。そのエリオットの指揮の下、獅子奮迅の活躍をしたのが副官のテルミドールという男だった。

彼は人々からテリーという愛称で呼ばれイギリス軍からは尊敬されていたが、反面、清国軍からは鬼のように恐れられていた。ある時突然頭角を現し、副官にまで上り詰めた彼は前身を一切公表しない摩訶不思議な人物であった。それにも関わらずその統率力と戦術は素晴らしい。彼はまた1人のインド人の部下を常に側に置いていた。2人は細かい作戦を練り、清国軍に壊滅的な打撃を与えた。それ以降皇帝は何故か戦意を喪失し、イギリス軍に領土を取られ続けていった。

その人物こそ、芥子の谷から忽然と姿を消したりユー・テリーと前芥子の谷の大臣、ヤコブの姿であることは誰も知らない。しかしそれが明らかになつたところで今のテリー、いやテルミドール達にとつて何の損害があろう。それを知っているのは読者のあなたと作者の私だけなのであるから・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8375c/>

芥子の花咲く

2010年10月9日21時35分発行